

地域文化を支える 人・社会・自然のつながり

フィールドダイアログ 島をめぐる、島と語らう
——琉球弧・与論島・やんばる

高橋そよ 編



人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究



地域文化を支える 人・社会・自然のつながり

フィールドダイアローグ 島をめぐる、島と語らう
——琉球弧・与論島・やんばる

高橋そよ 編

目次

1. はじめに 高橋そよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2. フィールドダイアローグ 01
小さなコミュニティの社会的革新
ー鹿児島県与論島にて・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
3. フィールドダイアローグ 02
植物と水と手仕事と
ー沖縄県大宜味村・今帰仁村にて・・・・・・・・・・・・ 73
4. 執筆者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108

はじめに

高橋そよ

私たちの暮らしは、さまざまな自然を利用することによって成り立っています。人間は自然からもたらされるものを、食べものや衣、住いのように生存に必要なモノや、人間らしく生きる喜びを育むものへと価値変換させる知恵や技術を工夫してきました。しかし、自然は常に恵みをもたらす存在であるとは限りません。時には洪水や津波、地震などの災いとなって、私たちの暮らしを揺るがすこともあります。人間はこのような「恵み」と「災い」が表裏一体となった自然との相互的な関わりを歴史的に重ねながら、その土地固有の文化や社会を形成してきました。そして、人新世（Anthropocene）と呼ばれる現代、私たちのライフスタイルそのものが、地域を超えて地球環境を脅かすグローバルな「災い」の要因の一つとされる危機が顕在化しています。本書は、私たちの暮らしを、自然と人との関わりの中へと紡ぎ直そうと試みる多様な分野の方々と旅をしたフィールドダイアログの記録です。コロナ禍という人類史に記憶されるパンデミックを経て、私たちは一緒に同じ土地をフィールドワークしながら、自然と人との関わりを多面的にとらえるための共感性の育み方や手仕事のあ

り方について語りました。その挑戦の途上では、分野や立場、経験、知識、価値観の違いという深い溝と向き合うこともあります。しかし、そのような互いの違いや立場を理解し合うことは、自分自身の専門性や仕事が果たす社会的な役割や責任を内省することといえるかもしれません。人類学者であり、哲学者であったイヴァン・イリイチは、著書『Tools for Conviviality（コンヴィヴィアリティのための道具）』（1973）の中で、これからの道具という技術は、「人間が人間の本来性をそこなうことなく、他者や自然との関係性の中でその自由を享受し、創造性を最大限に発揮しながら共に生きるためのものでなければならない」と述べました。そして、相反しているものが共存し得たときがコンヴィヴィアリティな状態であると述べています。人間らしく社会を構成し、生きるために必要なちょうど良い知恵や技術とは、どのようなものなのでしょうか。本書に収めた対話から、人間性を損なうことなく、主体的に知識や技法、もの文化を創造する、私たちの暮らしのあり方を捉え直す道標となる視点が見つかると思います。

フィールドダイアログ 01

小さなコミュニティの社会的革新
—鹿児島県与論島にて

March 29, 2023

高橋 今、私たちは、鹿児島県与論島におります。サンデル先生、声、聞こえているでしょうか。

サンデル Yes.

高橋 今日は、総合地球環境学研究所の名誉フェローの Prof. Sander Van Der Leeuw（以下、サンデル先生）が、琉球弧の沖縄島と宮古島、与論島と旅をされてきて、その旅の中でどのようなことを考えたのかということを、ぜひ島の若い人たちと一緒に聞きしながら、小さなコミュニティが持続的に生きていくためにはどうしたら良いのかを考えたい、その知恵やヒントを交換し合いたいと思い、今日の井戸端勉強会を企画しました。私は、今日、司会をします総合地球環境学研究所 LINKAGE プロジェクトの生存基盤ユニット長の高橋そよと申します。よろしくをお願いします。

サンデル先生と旅をする機会があることを総合地球環境学研究所 FEAST プロジェクトメンバーだった田村典江さんに相談をしたところ、ぜひ、サンデル先生と地域の方と一緒に交流するラウンドテーブルをしましょうと提案くださいました。田村さん、まず自己紹介も合わせて、どうしてこういう会の企画を提案して下さったのかを教えてください。

お願いします。

田村 ご紹介ありがとうございます。田村典江といいます。私は、今、大阪の大学に勤めていますが、ちょうど1年前まで地球研に所属していました。その頃は、食と農の持続可能性をテーマに研究をしていまして、漁業も研究の対象だったので、そのご縁で高橋さんと、とっても仲良くなりました。本日の参加者のゲストである、サンデル先生は、地球研で長く外部評価委員をお務めになっていました。皆さん、想像できると思いますが、普通、外部評価の先生は、とっても偉い先生で、私たちは、ジャッジされるような非常に息が詰まる思いをするんですけども、サンデル先生は、本当にとってもいつも励ましてくれて「ここは面白いから、もっとここをやったらいいよ」とか、全然、違う「こういうことがあるんだよ」というふうに、とっても私たちに優しく、真剣に応援してくれたんですね。今回、高橋さん、阿部さん、サンデルさんが参加された国際シンポジウム "Narrative Insights for Emerging Cultures of Sustainability" (2022 年 10 月 26 日～28 日、ドイツ・ポツダム) で、高橋さんが与論島の漁具の研究の発表をされて、それを後で、サンデルさんが「あれは、とっても良かったね。今度、日本に行くチャ

ンスがあったら見てみたいね」とおっしゃったのも一つの今回の旅のきっかけとお伺いしています。その話を高橋さんに聞いたときに、「自分の調査地にサンデルさんが来るんだったら、インタビューだけで終わるのは、絶対もったいないよ」と私は言いました。

サンデルさんは、もともとは考古学がご専門ですが、今は長い期間の人間の社会の変化と環境の変化の相互作用とか、あと持続可能性の問題、それから、皆さん、ご承知のように、現代の環境問題や社会問題というのは、とても複雑で、一つの問題の解決が次の問題を生んでしまうみたいなのところがあるんですね。そういうことにずっと着目していろんな研究を見て来られたサンデルさんなので、与論の皆さんが今、これ、面白いんだけど、これやったらどうなるのかなとか、もうちょっとここ、こうしたいんだよねというところと、サンデルさんのご経験は、絶対に響き合うと私は確信していました。

単に偉い先生が日本の地域へ行って、ちょっと話を聞いて終わりにするのは、絶対もったいないと思ったのが、今回の企画趣旨です。なので、経歴だけ見ると、アムステルダム大学、ケンブリッジ大学、パリ・ソルボンヌ、アリゾナ・ステート・ユニバーシティと、むっちゃ超偉いご経歴の先生なんですけれども、とっても元気付けてくれる

先生なので、ぜひ、皆さんと良い対話ができるといいなと思います。

もう一つ、与論の皆さんが今、直面されている課題は、私は世界中で同じ問題があると思ってるので、そういう意味でもサンデルさんの幅広いご経験から、他の国でもこうなんだとか、他の国でもこうだけど、でも、やっぱり与論は特にこうなんだ、みたいな話ができるといいなと思ってます。以上です。長くなりました。

高橋 ありがとうございます。今回の旅の企画の意図を汲み取り、このようなダイアログの機会を提案してくださったことを改めて知り、とってもうれしいです。では、まず、今ここに、与論の方もいらっしゃっているの、それぞれ自己紹介していきたいと思います。こちらのマイクに向かって…、こちらからいきますか。

佐藤 おはようございます。私は、与論でエコツアーガイドをやってます佐藤伸幸といいます。移住して7年目になります。私自身、与論にはルーツがなくて、旅行で来たことがきっかけ、そのまま今は宿泊業とガイド業と飲食業といった観光の仕事をしています。どうぞよろしくお願いします。

高橋 ありがとうございます。佐藤さ

んは、地域の方と薬用植物に関する本（注1）を書かれました。その話も少しご紹介いただけますか。

注）山悦子 2019「与論島の山さん—薬草に捧げた人生と幸せな終末へのメッセージ」KADOKAWA

佐藤 移住してすぐに、70代後半のおばあさんとお会いするきっかけがありました。与論では、伝統的な民間療法がごく最近まで残っていました。そのおばあさんは若いときに大病を患って、病気が治らないと診断されたのですが、島の薬草を、わらにもすがる思いで使い続けてきたそうです。今では回復をされ、島の知恵である植物の薬用利用を40年間かけて、未来に残そうと継承することに取り組まれてきた方です。精力的に町民に料理教室などを行ってきたのですが、足を患ってしまい、家に引きこもりがちになってしまいました。そんなときに、2016年に僕が移住してきて、おばあさんとお会いしました。僕はおばあさんとの交流を通して、この人がいなくなるとこの知恵は継承されなくなるのではないかと感じ、「何かできることがありますか」とおばあさんにお聞きしました。すると、今までおばあさんが経験されきたことや出来事、与論の素晴らしさを伝える本にまとめたたいとおっしゃいました。私は、そのときに地域おこし協力隊として役場に勤めていましたが、4

年間かけて地域の歴史や文化をも調べるなど内容も事実確認も含めて、校正編集し、出版するというお手伝いをしました。その本の出版のきっかけで、「野草カフェ」というお店を始めることになりました。

高橋 ありがとうございます。佐藤さんは、ある女性と出会い、島が培ってきた、伝統的な植物の薬用利用をどのように継承することができるかを、その方に寄り添いながらお手伝いをされてきた。そして、今、カフェとガイドという仕事を通して、与論の文化と知恵を伝える場をつくっています。私もこの3日間、島を案内していただきました。ありがとうございます。次、南さんをお願いしたいと思います。お願いします。

南 皆さん、お疲れさまでございます。鹿児島県与論町教育委員会の南勇輔と申します。この度は、よろしく申し上げます。私は、今、教育委員会で主に文化財のお仕事、特に発掘関係、いわゆる考古学関係の遺跡の調査を担当しております。この他にも与論島には、国の重要無形民俗文化財に指定された伝統的な民俗芸能「与論の十五夜踊」をはじめ、特徴的な地域文化が色々とありますので、そのような文化を保存活用するための行政的なお手伝いを

しています。それから、高橋先生たちと一緒にコロナアーカイブから始まった「島の自然と暮らしを考えるゆんぬ古写真調査」を通して、一緒にいろんなことを調べたり、あるいは調べてもらったりとか、たまに色々と教えていただきながら、与論の歴史や文化を掘り起こすことを仕事としています。今後は、それをどう島のために活用していくかを考え、取り組んで行きたいと思っています。

なかなか、まだ、できていることも、できないことあるんですけど、いろんな方から教えてもらいながら、高橋先生にもよく手伝っていただいていますけど、そういった形でいろんな人たちと関わりながら、歴史や文化のお手伝いをできれば良いということで、仕事をさせてもらっています。細かく言うと長くなりますので…、そういうことで。お願いします。

高橋 よろしくお願ひします。南さんについては、後から違う質問で聞こうと思ってるのですが、南さんは、与論島出身で島の高校を卒業後、沖縄にある琉球大学で考古学を勉強しました。その後、島に帰ってきて、今は島の歴史と文化を記録して、伝えることを、教育委員会という行政の立場から取り組んでいる方です。島の宝ものともいえる大事な仕事をされている、若手の

ホープです。ありがとうございます。はい、南さんは島の宝ものです。次、阿部先生、いきましよう。

阿部 総合地球環境学研究所の阿部です。東南アジアを中心に、主に途上国の農村で調査研究をしてきました。専門としては地域研究ということになります。最近は日本国内の農村地域を歩くことも多くなりました。今回は、先ほど田村さんから紹介あったように、今回サンデルさんとまず宮古島に行き、そのあと沖縄島をめぐり、今ここ与論島に來ています。宮古島、人口いくらぐらいかな、数万人・・・。

南 ありますよね、結構、人口は5万人ぐらい。

高橋 2005年に5町村が合併し、宮古島市となりました。2019年には、陸上自衛隊宮古島駐屯地も開設され、現在は約700人が配属されているそうです。

阿部 宮古島と沖縄島には、田村さんと同じFEASTのプロジェクトの一員で、今、京大の経済学部で特任助教を務めている小林舞さんが同行してくれました。サンデラさんの奥さんのアニックさんも含めて、4人で一緒に行動したわけです。アニックさんはフラ

ンスの人類学者で、パプアニューギニアでの調査経験が長い方です。

4人とも専門が異なり、関心も違います。同じ場所に行っても、自分とは違う所を見えています。同じ地元の方に話を聞いても、自分では思いつかない質問をします。なぜそんなものを見ているのか、なぜそんなことを聞くのか。そうした「違和感」もおもしろかったのですが、さらにその日に見たことや聞きたいことについて、車での移動中や食事のときに、いろいろ議論を重ねることができたことも、楽しかったですね。こうした作業を通じて、自分の視野が広がった気がしました。

今日は、ここ与論島の3人の方にそれぞれ違った視点で話をさせていただいて、それを共有していくことになりました。サンデルさんがどんな感想を持つのか、みなさんがどんな質問をするのか楽しみです。与論島についての理解を深めたうえで、この島の将来、さらに宮古島や沖縄島での見聞を踏まえて、少し広く共通の課題についても議論してみたいですね。地域が抱える課題は多いですが、将来に向けて何が大切なのか考えることができたと思います。

高橋 ありがとうございます。順番に私、先いきますね。私は、高橋そよと申します。私は、琉球大学で民俗学

を教えています。サンゴ礁で漁をする漁師さんの研究をしていて、特に自然と人との関わりの中で育まれてきた知恵や技術、道具などのもの文化に興味があります。社会変化の中で、人はどうのように知恵を編み出しながら、生き続けてきたのだろうかということに関心があります。その中でも、島という資源の限られた小さなコミュニティにおいて、暮らしを維持していく社会的な仕組みに関心があります。なぜなら、そこに地球という惑星の中で限りある資源と向き合わなくてはいけない、人新世時代を生きる私たちにとって、未来を考えるための大事なヒントがあるように思うからです。私自身は、このような問題関心を持ち、自然環境や歴史性の異なる様々な島をゆっくり歩き、まわっているところです。本日は、どうぞよろしくお願いします。隣にいらっしゃるのは、私の大事なパートナーである与論町漁業協同組合で働いていらっしゃる佳さんです。

池田 よろしいでしょうか。池田佳と申します。与論町漁業協同組合でお魚を出荷する販売の仕事をさせていただいています。私も与論出身ではなく、東京都出身であります。主人が与論島の出身で、結婚して与論島に来ました。佐藤さんと同じく、7年前からこちらに住んでいます。漁業を全く知らない

状態だった私が、与論の漁師さんたちと知り合ったことで、人は何のために生きているのかということを、改めて考えることができました。漁師さんたちは、食べていくために魚を捕っているのだけれども、その中に楽しみを見いだしながら生きている姿を見たときに、非常に与論の漁師に憧れというか、大好きになりました。漁師さんのために何かできないかということを日々、模索しています。

小さな島ですし、日本が今、漁業に対してはだんだん衰退していく時代の中で、どうやって海と向き合ってきた漁業が生き残っていくことができるのか、そしてどうやってこの漁師さんたちの笑顔を守っていけるのかという思いが、常に念頭にというか、心の中にあります。

もう一つ、与論島での日々の暮らしの中で大切にしたいと考えていることは、海と森とのつながりです。与論島には、ウンパルという言葉があります。海と畑という意味なんですけれども、それを大事にしてきた島ではありません。しかし私は今まで与論の人が当たり前にあって、サンゴ礁の美しさに比べて、どこか見逃していた森という部分について、高橋そよ先生と一緒に研究をされてきた渡久地健先生たちとの出会いによって気づかされました。大きな木が生えた森。これが、海に対し

てどのような影響を与えているのか、そして、その森や大きな木の役目や、そういったことと海との関連性がどのようにあるのかなということを、これから考えていきながら暮らしていきたいなとは思っています。夢ばかり語っている人間です。

高橋 夢を語りましょう。

池田 夢ばかりです。よろしく願いいたします。

高橋 次にサンデル先生。自己紹介からまず、お願いします。

サンデル To me? Sorry, I didn't understand that. I think the important thing is that I am not really an anthropologist. My wife is a real anthropologist and she introduced me to anthropology and to working in different context with different people. So, I am going to try to give you an impression that is partly mine, partly hers of what we experienced over the last few days.

I want to start with a remark that I think is important for your future. I think what is very striking is the sense of community that you have. Community, collaboration, helping

each other, those are the important things that you need to cultivate and to foster if you are going to get your own sense of your own future. And we saw that everywhere. All of our colleagues helped us understand how different people collaborated. And we also saw, and I think that was really, really interesting, the contrast between the urban part of this region and the rural part of this region. And we are very impressed with the fact that both the rural islands are actually very strong communities. Everybody knows everybody. Everybody has respect for everybody. Whereas the urban situation in the capital here was not so strong in that respect. There, people have been used to a different way of life in which the community is not so important and the individual is more important. And so, I think one of the really precious things you have in the islands here is that sense of community that keeps you strong. That keeps you resilient. So that's one element.

Another element that struck us is the importance of history here in both the outside islands. We saw lots of sanctuaries. We saw lots of burial places. We heard lots of stories

about trees, about all kinds of rocks and things like that. One of the real problems in the western world is that we don't think too much anymore about history. And it is history that has the richness on which the community actually depends. Because through history, little by little, things may have changed, but a lot of the values that are behind the communities are actually historical values. And so, the importance of history is another thing that struck us over the last few days.

Now you have also, clearly, lots of transition because your islands are under the pressure of the Japanese government, the American bases and all kinds of modern things. My personal opinion, and I hope that I share that with my wife, is also that those pressures, government pressures and pressures like that are maybe in some ways good, but in one very important way, I think they are not so good. And that is that they force society to think more and more about finance. About money. About the material things. And in that process, in our thinking, we lose a lot of the, and now comes the difficult word, dimensions, but these other aspects, the other sides of what life is all about.

And that is what you see when you look at Okinawa as a city, and you see all these big buildings come up, and all this stuff, these resorts and things like that which are basically only meant for a few people to make more money. And I think that is something that as a community you are not doing so much on the outlying islands, and I think that is very, very valuable.

I have to say that that also, for me, is one of the real values of Japanese culture because Japan has been forced after the Second World War to industrialize and to adopt all kinds of modern, western ideas. But underneath, your culture has maintained a lot of the ancient values that actually drove your society. And I think those are absolutely fundamental for your future. If you continue, and anybody who continues on the sort of strongly capitalist, financial sort of motivation, will in the end impoverish yourself and create problems for yourself because that society can no longer keep going. That society is coming to an end. And we see that in climate change. We see that in the exhaustion of resources. We see that also in the emphasis on everything financial.

So those are some of the impressions. I have more impressions and more stories, but I will, for the moment, see this as an answer to some extent to your first question, what was our experience during this trip. But before I stop, I want to thank everybody who has been with us. Everybody who has been helping organize this particular meeting, people in RIHN, people here, people in the other islands. We found a very, very pleasant atmosphere with very helpful people. And that is something quite extraordinary in this world. And so, thank you very much all of you for your contributions to the success of our trip. I think it's over to somebody else.

（私ですか？ごめんなさい、わかりませんでした。まず重要なのは、私は人類学者ではないということです。妻は本物の人類学者で、私に人類学を教えてください、さまざまな人々とさまざまな文脈で仕事をするのを教えてください。だから、この数日間で私たちが経験したことについて、部分的には私の、部分的には妻の印象をお伝えしようと思います。

まず、みなさんの未来にとって重要だと思われる発言から始めたいと思います。とても印象的だったのは、みな

さんが持っている共同体意識です。コミュニティ、協調性、助け合い、これらは、自分たちの将来について自分たち自身の感覚を得ようとするならば、培い、育む必要のある重要なものだと思います。そして、私たちはいたるところでそれを目の当たりにしてきました。すべての同僚が、さまざまな人々がどのように協力しているかを理解する手助けをしてくれた。また、この地域の都市部と農村部のコントラストも、実に興味深かった。そして、どちらの地方の島々も、実際には非常に強力なコミュニティの集合体であるという事実に、私たちは非常に感銘を受けました。みんながみんなを知っている。みんながみんなを尊敬している。一方、都市部では、そのような傾向はあまり見られないでしょう。そこでは、人々はコミュニティがそれほど重要ではなく、個人がより重要であるという異なる生活様式に慣れてしまっています。だから、この島々にある本当に貴重なもののひとつは、「共同体という感覚」なのだと思います。そのおかげで、回復力が保たれる。それがひとつの要素です。

もうひとつ私たちを驚かせたのは、島々における歴史の重要性です。私たちはたくさんの聖なる場所を見ました。埋葬地もたくさん見ました。木々や岩にまつわる話もたくさん聞きました

た。西洋世界における本当の問題のひとつは、私たちが歴史についてあまり考えなくなっていることです。そして歴史こそが、コミュニティが実際に依存している豊かさを持っている。なぜなら、歴史の中で少しずつ物事は変わってきたかもしれないが、共同体の背後にある価値観の多くは、実は歴史的な価値観だからです。歴史の重要性というのも、ここ数日間で私たちが感じたことのひとつです。

皆さんの島々もまた、明らかに多くの変化の中にあります。というのも、日本政府の圧力、米軍基地、そしてあらゆる種類の近代的なものの圧力下にあるからです。私の個人的な意見ですが、妻もこの考えを共有してくれていると思いますが、こうした圧力、つまり政府による圧力やそのような類の圧力は、ある意味では良い面もあるかもしれませんが、一つの非常に重要な点において、あまり良くないと考えています。それは、それらの圧力が社会に対して、金融について、お金について、物質的なものについて、ますます考えるよう強いているということです。そしてその過程で、私たちの思考の中で、多くのもの——ここで難しい言葉になりますが——次元、つまり人生とは何かということの他の側面、他の面を失ってしまうのです。

それは、沖縄を都市として見たときに目にするものです。これらすべての大きな建物、そしてこうしたもの、リゾート施設などといったものは、基本的には少数の人々がより多くのお金を稼ぐためだけに作られています。そして、それはコミュニティとして、皆さんが離島ではあまり行っていないことだと思いますし、それは非常に、非常に価値のあることだと思います。

第二次世界大戦後、日本は工業化を余儀なくされ、あらゆる近代的な西洋の考え方を取り入れざるを得ませんでした。しかし、その根底には、日本社会を実際に動かしてきた古くからの価値観の多くが維持されている。そしてそれは、みなさんの将来にとって絶対に必要なものなのです。このまま資本主義的、金融主義的なモチベーションを持ち続ければ、結局は自分自身を貧困化させ、問題を引き起こすことになるでしょう。そのような社会は終わりを迎えようとしている。それは気候変動にも表れているでしょう。資源の枯渇にもそれが表れている。経済的なものばかりが強調されることにもそれが表れている。

以上が、この旅の印象の一部です。もっと印象に残ったことやエピソードはあるのですが、ひとまず、この旅で私たちが経験したことは何かという最

初の質問に対するある程度の答えとさせていただきます。しかし、その前に、ご一緒して下さったすべての方々にお礼を申し上げたい。総合地球環境学研究所の人たち、ここにいる方々、他の島で出会った方々の全てに。私たちは、とても親切な人たちと、とても楽しい雰囲気の中で過ごすことができた。これはこの世界では非常に珍しいことです。私たちの旅を成功に導いてくれた皆さん、本当にありがとうございました。では、この辺で失礼します。）

高橋 ありがとうございました。今、歴史の重要性ということのお話をいただきました。まず、今日は、この歴史の重要性について考えることから始めたいと思います。与論島に最初に着いた日、日曜日の夕方だったのですが、南さんに与論島の歴史的な場所を案内いただきました。その中でも、与論城と呼ばれる、高い所にあるお城を案内いただきました。現在、与論町では、ちょうど文化財調査として発掘をされている、島の歴史や文化を考える上で大事な場所でした。まず初めに、南さんにお伺いしたいのですが、南さん、与論高校を卒業され、大学進学時に、多分、いろんな選択肢、こんなこと勉強したいなという選択肢があったと思うんですけども、その中でも、なぜ考古学を学ぶことを選んだのでしょうか

か。まず、そこからお伺いしたいと思います。

南 私がなぜ、考古学に興味をもったのかということですが、もともと、歴史が好きでございまして、テレビでも『世界ふしぎ発見!』という、日本で有名なテレビ番組がありますが、これをよく見ていました。それで、大学進学を考える際に、幾つか考えはしたんですけど、せっかくだったら歴史的なところを勉強してみて、もしうまく梓があったら、どこかの博物館に入れるといいなというぐらいの感じでした。

個人的にもう一つ、やっぱりこの道で行こうかなと思ったきっかけが、高校を卒業した後に、しばらくコロナ禍で自粛していて、最近では復活したんですが、各家に集まって地域のおじさんたちが頑張ってこいよと島を立つ子どもたちを励ます「飲み会」があるんですよ。そのときにうちの集落のおじさんで、役場にいた方なんですけど、歴史や発掘、文化財に関連する仕事が教育委員会にもある、と。当時、与論はまだ発掘調査をやってなかったもので、与論島でもできることになるかもしれないし、そういった所も鹿児島県内各地や沖縄もあるはずだけど、「島に帰ったらそういう仕事を狙えるかもよ」と言ってくれたのが、与論島でも、そういう仕事をできたらいいなと思っ

たのがきっかけでした。

あとは、考古学と一緒に民俗学にも少し興味がありまして。私が高校生の時に、琉球大学の社会人類学の先生方がうちの集落に調査にいらっしゃっていました。父からも、先生たちがきつとよくしてくれるはずよと勧められてたのもあり、実際、琉球大学に入ってみたら社会人類学の先生方によくしていただきました。

また大学と大学院では考古学のゼミで研究をしてきたのですが、実習で鹿児島県の本土へ行きますと、あちらの県の文化財関係者の方ともお話しする機会がありました。その中で、与論島にも文化財などいろいろとあるし、まだ担当者いないから頑張ってねと、軽くあおり立てられまして。それがきっかけで、いつかは島でできたらいいなと目指してやってきました。島には島に対する郷土愛的なこともありはするんですけど、仕事をする中で、島のデータがないというのは、島の歴史や文化を理解するためにも難しいと思いました。琉球列島の他の島々では、土器のデータやお城などの情報が収集され、Web サイトなどでも公開が勧められています。しかし、与論島にはまだまだ情報がない。ちょうど、奄美群島と沖縄の中間地点にある与論島の存在は、琉球弧の歴史や文化を考える上でも、こういった歴史や文化、人の動

きがあったのかということは、おもしろいテーマじゃないかなと思っています。

そんなことで、与論という島自体が非常にフィールドとしておもしろいなと自分なりに思い、勉強して来ました。そうした中で、いろんな縁があってと言いますか、役場のほうで、考古学担当の応募があり、受けたところ無事に通って現在があります。

結局、そういった些細なきっかけではありました。私としては、考古学をすることで、島の歴史や文化ということも重要なんですけど、それ以上に広く東アジアの海が繋ぐネットワークという視点から、この島にどうやって人が来て適応し、どのような関係を他地域と持ちながら現代に至ったのかということに興味あります。

高橋 ありがとうございます。南さんは考古学を学ぶことを選択したきっかけは、生まれ育ったコミュニティの多世代が集う集まりの中で、こういうお仕事もあるということを教えてもらって、自分の進路を考えてきた。そして今は、島に戻り、大学で学んだことを今度は伝える側にある。特に、とても大事だと思ったことは、まだ手づかずの部分の多い与論島の考古学的調査を進め、この島の歴史や文化の歩みを記録するという、次の世代につながるお

仕事をされているということです。

次、サンデルさんにお聞きたいと思います。南さんの案内で、最初に島の高台にある与論城に行き、お城から沖縄島を眺めました。与論島は、サンゴ礁が隆起したフラットな島なんですけども、沖縄島の山原の北部のほうが「高い島」の地形的特徴があり、とても大きく見えましたね。大和、日本と琉球のちょうどはざまにある島の風景を見たときに、サンデルさんは、あの風景からどのようなことを考えたでしょうか。

サンデル The first thing, I think, about the other islands is that they're close by and which basically means that the water in between is a major way of communicating with the islands. That means that there is a possibility to create among the different islands a wider community of ideas, of conceptions about the future, and that, I think, is a wonderful opportunity because it reinforces the opinion of individual people or individual islands. So, I think that is something that is very, very important.

Traditionally, in large parts of the Pacific, and I had myself the experience of that in the Philippines, in the situation with islands like that

it is the seas that are actually the way people relate, and not the land so much. So, I think that is an important part of looking at all these islands from this island or from any other islands, that they're very close and that it's easy to get there and the sea is calm. And that means that you've had lots of opportunities to actually communicate and to talk. And that means also, that you can innovate because you can take ideas that you see in other islands and actually bring them into your own community. (他の島々について私が思うに、まず第一に、島々が近くにあるということ、そして基本的に、島々の間にある海が島々との主要なコミュニケーション手段であるということです。つまり、異なる島々の間に、より広いアイデアや未来についての概念のコミュニティを作り出す可能性があるということです。これはとても重要なことだと思います。なぜなら、それは個々の人々や島の考えを強化するからです。

伝統的に、太平洋の広い地域において、そして私自身もフィリピンでその経験をしましたが、そのような島々の状況では、実際に人々を結びつけるのは海であって、陸地ではそれほどありません。ですから、この島から、あるいは他のどの島からであれ、これら

すべての島々を見るときに重要な点は、それらが非常に近くにあり、そこに行くのが容易で、海が穏やかだということだと思います。そして、それは実際にコミュニケーションを取り、対話する多くの機会があったということの意味します。そしてそれはまた、革新できるということも意味します。なぜなら、他の島々で見たアイデアを取り入れて、実際に自分たちのコミュニティに持ち込むことができるからです。)

高橋 ありがとうございます。島を繋ぐという視点から、次、佐藤さんに話を聞いていきたいと思いますけれども、私たち、佐藤さんの案内で島をぐるっと回りました。佐藤さんは、島の外から来た方ですが、佐藤さんは、今の与論島での役割をどのように考えながらガイドをされているのでしょうか。例えば、新型コロナウィルスのパンデミックによって、一度、島ごとロックダウンになって観光客がほぼゼロになった経験をしてきました。しかし、現在は、再び観光客の数はかなり戻ってきていると思います。外の世界とのつながり役として、佐藤さんの仕事はあると思うんですけれども、どのような思いを持ちながら、このように観光業が再スタートをする時に、今の仕事をされているのでしょうか。

佐藤 ガイドという仕事なんですけど、私は、日本のお客さまだけではなく、アジアやヨーロッパのお客さんも案内する機会があります。それぞれの国によって、自分のバックボーンというか、歴史性が違うので、例えば、与論のお墓とか土葬や洗骨の文化を紹介したときに、全然違う受け取り方をするんですよ。それに対して、変な誤解を与えないように、なぜ、こういうやり方をしているかということをまず正しく伝えるということ。そして、ガイドをやっておもしろいと思うことなんですけど、その人のフィルターを通じて、島が全く違った世界に見えるんですよね。今まで、いろんな方をガイドしましたが、1人として同じガイドがなかった。同じ島で、同じ場所を案内しているのだけど、毎回、違う結果になるんです。それが、とても興味深いと思いながら続けています。

僕は、海外もいろいろと旅しているんですけど、与論島というのは古き良き歴史とか文化が奇跡的に守られた島で、世界的に見てもすごく貴重な所だと思っています。案内してて、みんな今、現代化して疲れてる人が多いんですけど、ひと世代前の人類の暮らしをしてるから、懐かしく感じたりとか、ほっとして、もし道を誤ったら、ここに帰ってくればいいよねというような感想を持って。それが、ヨーロッパで

も、アジアでも、日本の人でも同じ感想を持つというのが、とってもおもしろいと思っています。

高橋 同じ島だけでも、いくつもの見え方が立ち上がってくるというのはおもしろいですね。阿部先生、今回、一緒に旅をされていたかがでしたか。

阿部 今の佐藤さんのガイドする人の国籍というか文化、その人、ガイドされる方の背景によって島の見え方が違ってくると。これ、大事なことなんだろうなと思いました。サンデルさんがよく使う、ごく普通の平凡な英語の言葉なんだけど、dimension というのがあって、どんな島も dimension がある。それをどうも僕らは、一つの見方、一つの使い方、あるいは、一つの価値だけで見てしまってるんだけど。意外なことに、いろんな人がこの島を訪れて、いろんな見方をすることによって、島の dimension がさらに増えていくというか。今まで隠れて見えなかったような dimension が見えてくるようになる。そういうことなんだろうなという気がしましたね。面白いことだな。僕は、dimension の使い方、サンデルさん、間違ってるかもしれないけど、ようやく dimension という言葉、今、使ってみました。どうですか。

高橋 サンデルさん、いかがでしょうか。

サンデル I think you're all right. But I want to make a point about this. In Miyako Island, what was for us, for my wife and for myself, a really fantastic new dimension was all the sanctuaries. Is this better? I hope so. OK, thank you. What I wanted to say is that for both for us, the overwhelming dimension of Miyako Island was all the sanctuaries. And the fact that everywhere there are remains of a past when people believed in different things than we are now as western or not the western people, that used to actually believe. And so, what came out of that trip was also sort of also a different sense of landscape. A different sense of landscape for people who are not the standard agriculturalist, but people who had a very different relationship with nature. A much more intimate relationship, a much more local relationship, and a much closer relationship. And I think that was for us a really, really important experience. So that is part of what I mean, and what you just said, that people from a different country bring a very different

vision, a different perspective to an island, and if you interact with them, that means that you can also sort of gain yourself a different perspective on that island. (その通りですね。でも、これだけは言っておきたいです。宮古島では、妻にとっても私にとっても本当に素晴らしい新次元だと思ったのは、すべて聖域だったということです。こっちの方がいい？そう願うよ。よし、ありがとう。私が言いたかったのは、私たち二人にとって、宮古島の圧倒的な demention は、すべての聖域だったということです。そして、西洋人、あるいは西洋人でない私たちが、かつて実際に信じていたこととは異なることを人々が信じていた過去の遺跡が至る所にあるという事実。そして、その旅から生まれたのは、風景に対する異なる感覚だった。標準的な農業従事者ではなく、自然とのまったく異なる関係を持っていた人々にとっての、異なる景観の感覚だ。より親密な関係、よりローカルな関係、より緊密な関係。そしてそれは、私たちにとって本当に重要な経験でした。ですから、異なる国から来た人たちは、島に対してまったく違うビジョン、違う視点をもたらしてくれる。そして、彼らと交流するならば、それは自分自身もその島について異なる視点を得ることができるということを意味しています。)

高橋 ありがとうございます。自らを見いだすということ、すごく大事なメッセージだなと思いました。次、佳さんなんですけども、漁業協同組合で働いてる佳さんのご紹介で、私たちはある漁師さんのお家に行きました。この方は、与論で伝統的に漁で魚を捕るために使っていた道具をコレクションしていて、私たちは、そのコレクション小屋を訪ねました。そこで、サンデル先生やアニック先生もすごく感動して、漁師さんとたくさんの対話をしました。まず、サンデル先生、あそこの漁師さんとの出会い、あそこでマテリアルカルチャーを見たときの感想を教えてくださいたらと思います。

サンデル Many things. I think one thing is that his fishing was a fishing to gain a livelihood, but to also respect the environment and to respect the fishes and to respect the ocean. He used a technology that was actually adapted to that situation and that did not over catch the fish. Actually, a lot of this fishing was line fishing or it was a difficult way of deep-net fishing. But both were aimed to provide enough fish for people to live, but to also make sure that you didn't exhaust the fish that was there.

I think that was one important lesson.

The other important lesson was the role of technology. He demonstrated how at a certain point, not so long ago, somebody invented a different way to catch squid. And that suddenly gave rise to a different part of exploiting the ocean. And that gave rise to different catches and different commerce and in particular, sending a lot of those squid once they've been caught actually, to the Japanese mainland. And so, there is a link between the technology, between the market, between the society and between the ocean. And one of the important things that his impression and his talk expressed was the importance of that link. That if you get outside of that link, either by ignoring several of those dimensions, for example, if you catch too much fish to make too much money and don't watch the limits of the fish itself, then you actually go wrong. And so that was a very important lesson for us to hear.

The same thing also came across in our long discussion yesterday at the museum because the people who are running the museum have the same attitude. They actually respect humans as part of nature and they therefore

have a different vision on what people can do, how their values can evolve and so on and so forth. And so that to me is actually a really important part of our experience over the last couple of weeks, that you can never... the ancient Greeks had a wonderful saying and it was very simple. And it said, "Never too much." And that meant that you could exploit things, but you could never exploit them beyond reason. And that is, I think, one of the biggest problems of the modern world because a lot of what we do is to exploit beyond reason. And here on the islands, I felt a culture that does not do that, and I think that was a really important contribution of this culture, both to the resilience of the community and the resilience of the relationship between people and their environment, but also to the wellbeing of the world in a more general sense. (多くのことをね。ひとつは、彼の漁業は命を得るための漁業であると同時に、環境を尊重し、魚を尊重し、海を尊重するための漁業であったということです。彼は実際にその状況に適応した、魚を捕りすぎない技術を使った。実際、この漁の多くは一本釣りや引き縄であったり、難しい網漁であったりした。しかし、どちらも人々が生活す

るのに十分な魚を提供することを目的としていましたが、同時に、そこにいる魚を使い果たさないようにすることも目的としていました。それがひとつの重要な教訓だったと思います。

もうひとつの重要な教訓は、テクノロジーの役割でした。彼は、それほど昔ではないある時点で、誰かがイカを獲る別の方法を発明したことを示した。それが突然、海を利用する別の方法を生み出した。特に、一度獲れたイカを大量に日本本土に送ることができるようになった。このように、技術、市場、社会、そして海の間にはつながりがある。そして、彼の印象と話が表現した重要なことのひとつは、そのつながりでした。その関連性から外れてしまうと、たとえば、儲けるために魚を獲りすぎて、魚自体の限界に目を向けなくなるなど、いくつかの次元を無視してしまうことで、かえってうまくいかなくなってしまうということです。これは私たちにとって非常に重要な教訓でした。

昨日の民俗村での長いディスカッションでも、同じようなことが語られた。彼らは実際に人間を自然の一部として尊重しており、それゆえに人間ができることや価値観を進化させる方法などに関して異なるビジョンを持っていました。私にとっては、この2、3週間の経験で本当に重要な部分だっ

た。古代ギリシャ人には素晴らしい格言があり、それはとてもシンプルなもので、”Never too much”（多すぎることはない）というものでした。つまり、物事を利用することはできても、道理を超えて利用することはできないということを意味していました。そして、それは現代世界の最大の問題の一つだと思います。なぜなら、私たちが行うことの多くは、理性を超えた過剰利用だからです。この島の文化は、地域社会の回復力、人々と環境の関係の回復力、そしてより一般的な意味での世界の幸福の両方に、本当に重要な貢献をしていると思いました。）

高橋 ありがとうございます。さまざまな道具を編み出してきたところを、昨日は見てきました。その中で搾取をしない持続可能な漁をすることが大事である一方で、ご飯を食べていくためにはどうしてもお金を稼がなくてはいけない。そのバランスをどのように取っていくかということが、コミュニティを維持していくためにとても重要になってくると思います。その中で、佳さんは、漁業協同組合の競り人、競りを統括するマネージャーというか、指揮をするコンダクターのようなことをされています。まさに、魚の価格が決まっていくことをマネージメントしている、大事な仕事をされています。

きっとサンデル先生も、佳さんに聞きたいことが、いっぱいあるんじゃないかなと思うんですけども、今度はサンデル先生から、佳さんに聞いてみたいことを教えてください。

サンデル OK. I was very impressed when we talked to her, that what she does is she tries to find the right balance between too much and not enough. When a fisherman catches a lot, he thinks that maybe he doesn't need a very high price for the fish. When the fisherman doesn't catch enough, his life is in danger or his family's life is in danger. And then she says, maybe that person has to get a little bit more for that fish. So that to me was a fascinating way of talking about how her role as a mediator in this fish market actually worked. And so, I have lots of questions about it, but one of the most immediate questions that springs to mind right now is how does she judge that? What are the values and the criteria that are important for her in coming to those decisions?（私たちが彼女と話したとき、非常に印象的だったのは、彼女がしていることは、やりすぎと不足の間の適切なバランスを見つけようとして

いるということです。漁師が多く獲ったとき、彼は魚に非常に高い価格は必要ないかもしれないと考えます。漁師が十分に獲れなかったとき、彼の生活や家族の生活が危険にさらされます。そして彼女は、おそらくその人はその魚に対してもう少し多く得なければならないと言います。ですから、それは私にとって、この魚市場における仲介者としての彼女の役割が実際にどのように機能しているかについて話す、魅力的な方法でした。ですから、それについて多くの質問がありますが、今すぐ思い浮かぶ最も直接的な質問の一つは、彼女はどのようにそれを判断するのかということです。それらの決定に至るにあたって、彼女にとって重要な価値観や基準とは何でしょうか。)

池田 非常に単純な質問なんですけど、非常に難しい質問でもあります。まず、どうやってバランスを取っているかというところなんですけれども、当然、魚が多ければ値段は下がります。たくさんあるので、仲買さん、または、鹿児島や沖縄の競りでも値段は、当然、価値が低くなるので、同じ魚でも下がります。かといって、逆に今度は、少な過ぎた場合に、大きな市場では利用価値がなくなる可能性があります。今、日本の経済であれば、大きな居酒屋

屋チェーンですとか、おすし屋さんのチェーンは、大量に同じ種類の物が欲しいので、少な過ぎるとまた、値段が下がるという現象が現代社会では起きている。そこで、少ない魚をいかに高く売るのが。そして、今、現状として、鹿児島や沖縄の競り値がどれぐらい付いていて、どれぐらいの出荷量があるのかというのを事前に知る必要があります。それには、もちろん、県の市場、大きな市場の担当者とのコミュニケーションが非常に必要になってきて。沖縄ですと、そろそろ大型のマグロ船が帰ってくるから、明日からマグロが値段が下がる。そういった情報を先に得れば、もっとマグロが高く売れる所に与論のマグロは送ることができます。

これは、一番、基本の問題がやはり、コミュニケーションだと思います。多くの人と話をして、心を通じ合わない、商売なのでそをつく人もいらっしゃると思いますので、その相手の本質を見て、本当のことを言ってるのかなという部分等を考えなければいけない。ただ、もっとそれを深掘りすると、やっぱり心と心のつながりですね。そしてそれが、最初の一番のメインの質問である、判断の基準はどこにあるのかということなんですけれども。相手を思う心に、私は、判断基準を持っています。漁師さんがいかにもうけられるかなということ。また、島外出荷でセリ

に出す時に他の県の大きな市場の競り人も、やはりその方がやりやすいように、少しでもこちらでできることを考えて、魚の状態をよくして送るのですとか、お互いがお互いを思いやる、そういった気持ちを持ってやることを私は判断基準としてやっておるので。正解か分かりませんが、今のところは、結局、魚を売る人、買う人から、ありがとうという言葉をもたらえている状態が一番いいのではないかなと思っています。

高橋 ありがとうございます。

サンデル So if I understand you right, you have to be at any time informed about the prices and the quantities in the other markets. So, do you every morning on the web or by telephone communicate with the market makers in those different markets? (私の理解が正しければ、あなたはいつでも他の市場の価格と数量を知らされていなければなりませんね。では、毎朝ウェブや電話で他の市場のマーケットメーカーと連絡を取っているのですか?)

池田 はい、そのとおりですね。一番は、会話、電話が一番メインです。メールですと心が通じない。音、声のト

ン、うれしそうに言っているのか、困って言っているのか、そのトーンまでを感じ取ることで相手の考えていることを読み取ろうとしてやっています。

サンデル Yeah, OK.

高橋 ありがとうございます。すごく面白く聞いてました。競りオークションなので、市場経済ではあるんだけど、そこに売る人と買う人の思いやり、心を伴った市場経済というのをうまくコントロールというか、うまく判断をしながらやっているのが、多分この与論の漁業の特徴の一つになるのかなって思いながら、話を聞いていました。そういう面では田村さん、田村さんは日本列島あちこちの漁村であったり、林業であったり、さまざまな生業に関わる地域を見てきていますけれども。田村さんから聞いてみたいこととか、田村さんも一緒にこの3日間、与論島を旅しましたがけれども、何か感想であったりとか、聞いてみたいことがあれば、お願いします。

田村 そうですね。今の佳さんのお話が結構、私がここしばらくずっと持ってる問題意識にぶつかってて。今、消費側が大型化してるので、大規模チェーンレストランとか、大規模居酒屋チェーンとかに出そうと思うと、同

じ大きさの魚をたくさん出荷することが喜ばれるんですね。そうすると、天然の魚よりも養殖のほうがいいよねとなるんですけど。私は、持続可能な食をやってるんですけども、そういう面からすると、すごい逆効果というか、後退で。海のお魚って、ちゃんと管理すれば人間が手をかけなくても育って、永遠に食べ続けられる。というか人類はそうやって食べてきたのに、それが今の市場経済のシステムだと扱いくくなって、わざわざ人間がお金をかけてエネルギーをかけて育てた魚のほうがいいっていうのは、すごい危ないと私は思ってるんですよ。人間の持続可能性の手段がどんどん今、削り取られてると思ってて。それは、私は魚をやっているんで、魚で今もう、ひしひしと恐怖を感じてるんですけど。

逆に昨日、与論民俗村を見せていただいてお伺いしたのが、昔は何でも自分たちで作ってたんだけど、今度、経済成長期になったら、買ったほうが早くなって、買うようになって。でも、それじゃちょっと危ないと思って、こうやって昔の民具をコレクションしてるんだよねっていうお話を聞いて、同じ話だなと思ってですね。だから、本当は島なので、離島なので、他よりもっと持続可能性の手段が多かったはず、もっと持続可能だった。京都の街

中だったら死んじゃうような状況でも、与論だったら何とか生きていけるみたいなことが、昔はきっとあったはずなのに今、それがマーケットの関係で逆転してるのかな、みたいなことを最近、考えてて。それは、「そうですね」と言って、終わりなんですけど。それをどうやったら元に戻していけるのかなっていう。本当に私、最近、どうやったらその持続可能性の幅を各地で大きくしていけるかなと思ってて。その辺は、与論の皆さんはどう思ってるの……。私はそういうことばかり考えてて、与論に行くからそう見えちゃうだけで、別に地元の人はいんまりにしないのかな。どうなんでしょう。

高橋 どうですか、佳さん。

池田 私の意見として、私は特に36年間ほど都会で、東京で暮らしておりましたので、東京のいい面も知ってますし、悪い面も知っておるのですけれども。本当にこの同じサイズ、同じ物が大量という意味では、農業がまさに先を行っていたと思います。画一されたサイズの大根でなければ売れない。曲がったキュウリは売れないという中で、ただ、長く続いた結果、今の現状、少しずつではあると思うんですが、都会だと高いスーパーなど高級な場所で

逆に曲がったキュウリですとか、そういうものを選ぶ人たち。そういう人たちが増えてきているようにも思えます。天然なものですとか、作った方の顔が見えるお米が食べたい、野菜が食べたいという方たちが増えてきてるようにも思うので。これを漁業も含めて、捕れた人と食べる人がいかにつながっていけるかというのを、むしろ現代社会であれば、こういったインターネット社会ですので、遠い場所にいてもつながれると思うので。そういう部分をもっと簡単にできていくようなシステムが作り上げられないかなというのは思います。

例えば、与論の漁業でいうと、〇〇丸が捕って来たマグロ。その船の人はこんな人っていうのを食べる方とつながって。今日のこのマグロは、与論のあの方が捕ったんだよというような部分ですね。これに関しては、輸送のコストの問題もあったり、いろいろと難しい問題点は出てくると思うんですけども。以前、単価が高いということで、私がやろうと思ったのがペットフードだったんですね。〇〇丸さんが獲ったマグロのジャーキー。そうすると、ペットを子供以上に大切にしている主が多いですからね、私もそうですけども。何とかさんが捕ったマグロのジャーキーだよ。今度、与論のその人にお母さんは会ってくるからね、と

いう部分でまた、観光にもつながるかなというような夢を持ったことがあります。

高橋 ありがとうございます。今、最初に文化の継承とか、経済。その経済も思いやりというものがありながら、続いていくことと、どうやったら、ただ、持続可能な食とか手段の幅を持たせていくことができるのかということが、田村さんから質問があったと思うんですね。佳さんもこういうアイデアをいろいろ出してくださったんですけども。サンデル先生にお聞きしたいのですが、例えば、与論とか宮古とか小さなコミュニティにとって、持続可能な食や暮らし、あるいは、文化をこれからも続いていくために、面白い事例だったり参考になることがあれば教えていただきたいなと思います。

サンデル I think you should fight to keep that situation. I think that means that you need to politically engage and make sure that these islands are not overrun by the western-inspired industrial way of living, which means that you eat the local produce, that you avoid a lot of manufactured foods because they're not healthy at all, actually, they're very dangerous. But in a more general sense, I think

my real lesson here is to point to the danger of not doing this. The danger of looking at television, getting yourself sort of ideas from the television that life can be better, which in the end it isn't. It is only more one-sided. It is only more individualistic. If you lead that sort of, let me call it, western lifestyle, you effectively lose a lot of the sense of community because you don't share so many things anymore.

And so, for me, the real lesson from these days is that there are communities that are managing quite well and that are not succumbing to advertising, to all the fantasies of the people who make the film, and that actually stay thinking about real life as it is. I think part of the western ideology has been to corrupt people's minds and to make people think about things that are not possible, and not think about what the reality is of their life. And by doing that, the people who adopt that attitude, they ultimately transform the society in a very destructive way. There are colleagues of mine who basically compare that to cancers. To physical cancer that people can get because the regulation of the cell is no longer

realistic. And so, you get all kinds of phenomena that are not really long-term usable or sustainable.

And so, the lesson here is that I think you have a very precious way of living in these islands, and that trying to change it by getting too many tourists, I think is not a very good idea. I think, if you want to get tourists, and I understand why that is important, you need to do it with many limitations and many conditions. The biggest problem that we see in many places and we saw it in the central island here, when our group went and lodged for two nights in a resort, we were all very unhappy because you couldn't have a normal, pleasant lifestyle in those resorts. If I use a very unpolite term, the resort was basically created for mass feeding, very cheap, lots of people, and basically it meant that there was no service. There was no cooking. You had to do it all yourself. And I'm not against people doing it themselves, but I am against trying to create an organization that does that for hundreds and hundreds of people every night. And so, for me, that mass tourism, I think is one of the big dangers of the life on these islands.

And then, another aspect of all

of this is education, but maybe we can talk about that on the basis of a different question, (その状況を維持するために戦うべきだと思います。つまり、地元の農産物を食べ、多くの加工された食品を避けるということです。しかし、より一般的な意味で、私がここで言いたいのは、そうしないことの危険性を指摘することだ。テレビを見たり、テレビから「人生はもっと良くなる」というような考えを得たりすることの危険性だ。結局はそうではない。より個人主義的になるだけだ。そのような、西洋的とでも呼べるようなライフスタイルを送っていると、多くのことを共有することがなくなり、共同体という感覚を事実上失ってしまう。

だから私にとって、最近の本当の教訓は、広告や映画を作る人々の空想に屈することなく、現実の生活をありのままに考え、うまくやりくりしているコミュニティがあるということだ。西洋のイデオロギーの一部は、人々の心を墮落させ、ありもしないことを考えさせ、現実の生活について考えさせないことだと思う。そうすることで、そのような態度をとる人々は、最終的に非常に破壊的な方法で社会を変えてしまう。私の同僚には、基本的にそれをガンに例える人がいる。細胞の制御がもはや現実的でないために、人々は肉体的なガンになる可能性がある。つま

り、長期的に使用できるものでも、持続可能なものでもない、あらゆる種類の現象が起こるのだ。

だから、ここでの教訓は、これらの島々には非常に貴重な生活様式があり、観光客を増やしすぎてそれを変えようとするのは、あまり良い考えではないということだ。観光客を増やしたいのであれば、それがなぜ重要なのかは理解していますが、多くの制限や条件をつけて行う必要があります。私たちのグループがリゾートに2泊したとき、そのようなリゾートでは普通の快適なライフスタイルを送ることができないので、私たちは皆とても不満に思った。とても失礼な言い方をすれば、そのリゾートは基本的に集団給食のために作られたもので、とても安く、たくさんの人が泊まれる。料理もない。すべて自分でやらなければならなかった。自分でやることに反対はしないが、毎晩何百人、何千人という人々のためにそれを行う組織を作ろうとすることには反対だ。私にとって、このような大量観光は、この島での生活の大きな危険のひとつだと思う。

そして、これらすべてのもうひとつの側面は教育ですが、それについてはまた別の質問でお話ししましょう)

高橋 ありがとうございます。ちょうど私も教育の質問にいかうかなと思っ

てたので、ありがとうございます。今回、私たち一緒に旅をする中で、教育をテーマにディスカッションすることが何度ありました。それで、あらためて、サンデル先生に聞きたいなと思ったことは、こういった社会と自然との相互作用であったり、暮らしをこれからどうするかということを考える上で、なぜ、教育に注目をするのか。サンデル先生の教育に対する考えを共有したいと思います。

サンデル I have to start that remark by saying something about my experience with education in other places which is very often very standardized because in many countries education serves to create a homogeneous society. What I was very impressed with here in our discussions about education is that education is much more locally based. That it's managed by prefecture and so not by the country as it is, for example, in France. And so that is one aspect. The other aspect that I heard and you can tell me more about it because I didn't hear much about it is that it's actually possible for people in the population here to contribute elements of the curriculum that the students are being taught. So that means that there

is a more direct relationship between local problems and local ideas and the education that the children locally actually get. And I think that is really, really important.

But it goes further than that. Education here, and I didn't know this, but we talked a lot about the fact that you have high schools that are specialized, for example, in the arts, agriculture, now I'm doing something to the microphone, I think. And I think that also is a really interesting idea. In most western countries, there is nothing like that, and you have no high schools that are specialized in those kinds of topics. At the same time, and we saw this last night when we saw the performance in the theater, we can also see how important art is in awakening people and in getting people to think differently. And so, if you have high schools that are completely dedicated to art and that leaves students very free to express themselves, you create a very different and much more living culture in an area. So, I think there, there are strengths in your education system here that can be enhanced, that can be made bigger and better, but that is going in what I think is a very good

direction. (まずはじめに、多くの国で教育は同質的な社会を作るために行われているという私の経験から話を始めましょう。教育について議論する中で私が非常に感銘を受けたのは、教育がより地域に根ざしているということです。例えばフランスのように国単位ではなく、都道府県単位で管理されている。これはひとつの側面です。私が聞いたもうひとつの側面は、あまり詳しく聞けなかったのですが、もっと詳しく教えてほしいのですが、生徒が教えられているカリキュラムの要素を、この住民の人たちが提供することが実際に可能だということです。つまり、地元の問題やアイデアと、地元の子供たちが実際に受ける教育との間に、より直接的な関係があるということです。これは本当に重要なことです。

しかし、それだけではありません。ここでの教育は、私は知らなかったのですが、例えば芸術や農業に特化した高校があるという事実についてよく話しました。ほとんどの欧米諸国では、そのようなトピックに特化した高校はありません。同時に、昨夜の劇場でのパフォーマンスを見たときにも感じたのですが、人々を目覚めさせ、異なる考えを持つようにさせる上で、芸術がいかに重要であるかということもわかります。もし高校が完全にアートに特化し、生徒が自由に自己表現できるよ

うになれば、その地域にはこれまでとはまったく異なる、より生き生きとした文化が生まれる。ですから、この教育システムにはもっと強化できる長所があり、もっと大きく、もっと良くなることができるのです。)

高橋 ありがとうございます。教育委員会で勤めていらっしゃる南さんに、与論島のローカルなカリキュラムがあるのが、与論島の教育の特徴的なことだと思うんですね。小学校でも島の言葉を勉強したりとか、あるいは、地域の方が授業を提供したりとか、比較的、地域の文化を学校教育の中にも取り込みながら、子どもたちがコミュニティの歴史と文化を学んでいるんじゃないかなと思います。与論の教育の特徴的なことと、これからこういうことをやっていきたいと思う、みたいなところを少し語っていただけるといいなというふうに思います。

南 私個人のでもいいんですよ。

高橋 もちろんです。

南 その辺りは、本来、教育長が話す内容ですし、私はそもそも課が違うんで、情報、全く入ってこない立場ではないのですが、すみません、教育委員会といっても、隣の課と言ったらあれ

ですけど、部署が違うので、把握しているところと把握してないことがありますので、私個人が知ってる範囲内と、個人的に思っていることということでお聞きください。

ローカルカリキュラムということで、最近、与論町では国や各財団とかからお金もらいまして、海洋教育というものをやっているとところです。詳しいことは、むしろ他の方のほうが詳しいような気がするんですけど。名前が海洋教育とありますが、海洋だけじゃなくて、島の歴史や文化とかいろんなものをまとめて学びながら、そういったことからどんなことを子どもたちが島の問題と捉え、それをどう解決したいかというのを学ぶカリキュラム作るということでやっているとところです。

そういった中で、やはり島の問題をどう捉えていくかということで、いろんな話があるわけなんですけど。その中で、地域の方々に、専門の方々、たまに私でしたら、分からない質問あったりしますが、または、観光や漁業関係など色々な方に話に入ってもらったりとか。または、例えば、屋外のほうではよく日本国内で行われている学校の中でのいろんな普通の授業というのが一般だったりするんですけども、外の発想もさまざま取り入れる中で、島の問題解決だったりとか、島が今、こういった問題があって、何が課題で、

そこから各子どもたちが点数で判断するのではなくて、どう考えたかっていうのを授業の中で考えていくというのをやっているようです。それで、ここ数年で形が出てきたところなので、それを今後、町の中である程度、形としてつくっていくというのを課題としてやってますということで、伺っております。

私は、その末端で歴史とか文化だとか、そういったところで担当しています。島の色々な伝統文化、子どもたちもよく年に何回か海洋教育の発表の機会がある中で、島の言葉をどう、つないでいくんだとか。ローカルヒストリーや十五夜踊りという伝統的な芸能をどうつないでいくかを考えていくことになると思います。あとは、個人的には、他にもいろんな島の歴史とか文化、いろんなものをどう捉えていくかというのは、さまざまあると思いますので、そういったところをお伝えできるようなことをするのと、私自身も自分なりの話をできていけるようにさまざまな機会をつくらんといけないと思っています。そんな形でちょっととりとめもない話となりましたが、よろしいでしょうか。

高橋 ありがとうございます。伺っていて大事だと思ったのは、教育といったときに、学校で学ぶ教育と学校では

ない場所で学ぶことの両方がある。与論島では、学校教育でもローカルな文化や歴史、言葉を学ぶことができるし、十五夜踊りという地域の伝統的な儀礼にも子どもたちも参加する。そういう伝統的な行事に子どもたちが参加したり、見る機会が身近にある。そして、自分が大人になったら参加すると実感する経験が、近くにある。「学ぶ」という意味では、上手にバランスが取れていて、大事なのかなと思いました。サンデル先生、こういう学ぶという場の、先程自由というお話がありましたけれども、どうするとこういう自由な学びの場というものをつくっていくことができるのでしょうか。

サンデル I think it's very important and it is an essential part of education. So, I want to answer this by referring, a few years ago with Abe sensei, we went to northern Japan and there we visited a school where all the teaching was done outside in a forest. And only when it really, really rained very badly, the teaching would be done inside a classroom, by in that way, changing the context of the teaching and thereby also referring to that different context. Referring in all you teach to the nature around the children, you actually create, I think, a very different

attitude. And that was very impressive to us at the time as a way to promote sustainability learning.

The other thing that I think is really important that you have already touched upon is that you have to combine classroom teaching and theoretical teaching with practical teaching. When we spoke yesterday to the man in the museum about the importance of practice rather than theory, what became very, very clear is that without emphasizing practice, people have a hard time dealing with real life because real life is all about practice. And so, you have a very big difficulty if you have only learned theory to actually deal with real life. It is something that I experienced myself a lot. I was trained in many ways in theoretical university education. And as my wife says regularly, I can deal with the theory of life, but I cannot deal with the actual practice of life. And I think that is definitely true, but it is also, for me, a big handicap. And so, I would argue that teaching children from a very early age in a way that actually combines thinking and theory with practice is very important.

And I want to end that topic with one other remark. In most western

schools, you have 30 kids and the teacher has two tasks. On the one hand, he or she is to develop the thinking of the students. And on the other hand, he or she has to develop the social aspects of the life of the students. And that's very difficult to combine. And so, in very many cases, what you see is that the students are taught a set of stories that are for them, giving them the impression that they are the truth. And I think one of the really important things that we have to change is that idea. I think we should be educating children in a way that emphasizes that there are always choices and always alternatives. In that, in order to make a choice, they have to themselves evaluate those different alternatives. So that we don't talk about a truth that everybody has to accept, but that everybody gets to develop their own way of looking at life. (それはとても重要なことで、教育には欠かせないものだと思います。数年前、阿部先生と北日本に行ったとき、ある学校を訪ねたのですが、そこではすべての授業が屋外の森の中で行われていました。そして、本当にひどい雨が降ったときだけ、教室の中で授業が行われました。そうすることで、授業の文脈を変え、

それによってまた別の文脈に言及することができるのです。子どもたちの周りの自然に言及することで、まったく違った態度が生まれるのです。サステイナビリティの学習を促進する方法として、当時の私たちには非常に印象的でした。

もうひとつ、本当に重要だと思うのは、すでにおっしゃったことですが、教室での授業や理論的な授業と実践的な授業を組み合わせることです。昨日、与論民俗村の方に理論よりも実践の重要性についてお話を伺ったとき、非常にはっきりしたのは、実践を重視しなければ、人々は実生活に対応するのが難しいということです。理論だけを学んでいると、実生活に対応するのが非常に難しくなる。これは私自身が何度も経験したことです。私は理論的な大学教育でさまざまな訓練を受けてきました。そして、妻が常日頃言っているように、私は人生の理論には対処できても、実際の人生の実践には対処できない。それは間違いなく真実だと思うが、私にとっては大きなハンディキャップでもある。ですから、私は、幼い頃から子供たちに、思考や理論と実践を実際に結びつけるような方法で教えることが非常に重要だと主張したいのです。

最後に、もうひとつ言いたいことがあります。欧米のほとんどの学校では、

30 人の子供がいて、先生には 2 つの仕事がある。ひとつは、生徒の思考力を伸ばすこと。そしてもう一方では、生徒の生活の社会的側面を発展させなければならないことです。その両立は非常に難しい。多くの場合、生徒たちは自分たちのための物語を教えられ、それが真実であるかのような印象を持たされる。そして、私たちが変えなくてはならない本当に重要なことのひとつは、その考え方だと思います。子どもたちには常に選択肢があり、常に選択肢があることを強調するような教育をすべきだと思う。選択をするためには、子どもたち自身がさまざまな選択肢を評価しなければならない。そうすれば、誰もが受け入れなければならない真理を語るのではなく、誰もが自分なりの人生の見方を身につけることができるようになるでしょう。)

阿部 阿部です。今のサンデルさんの話を聞いて、実生活、real life での学びということ、これが、僕もサンデルさんと一緒に昨日、菊さん、民俗村の館長さんの話を聞いて。菊さんがおっしゃってたのは、クラブ活動が始まってから、どうも駄目になったんだよ。これは、決してクラブ活動そのものの批判してるわけではなくて、学校の授業が終わって、さらにクラブ活動で時間を学校で過ごす。その結果、家庭によっ

ていろんな仕事を一緒にお父さん、お母さんとやって、そこから学ぶという機会がなくなってしまった。これが、実は、大きな転換点だったんだよねというような話をされてた。そのことを思い出しますね。それでももちろん、ローカルカリキュラムとして、学校はそういったことを積極的にやろうとしてるということは、大事ですけど、実際にいろんな実生活の中で体を動かしながら、学んでいく。そういった意味でいうと、実は、お祭り、儀式というのも子どもたちにとっては、これほど貴重な学びの場はないんだろうなと。文化財の生かし方としては、教育ということも、かなりそういった伝統的な芸能意識、そこから子どもたちが多くの地域の文脈の中で、大切なことを学んでいける、大切な機会なんだなというのを昨日、館長、菊さんとお話ししながら、考えさせられたことですね。

サンデル Excuse me for a moment, my computer is almost dead. (ちょっと失礼、コンピューターのバッテリーがなくなりそうだ)

池田 同時通訳は、ここで休止してください。

高橋 ちょっと短い休憩でした。あ、このやりとりも訳した？ありがとうございます

ざいます。あと残り30分となりましたね。きっとサンデル先生も、この旅の中で、聞いてみたいと思ったことがあるかと思います。サンデル先生、もし、よかったら、島の皆さんに聞いてみたいことを教えてください。

サンデル OK. I think what we have done today is talk about important elements of your own future. And that is where I have not only questions, but also maybe some ideas to share because I think the really important and also difficult thing where the fact while that you have an island and you have a community are big advantages, whole idea is that you have a basis in the past and in the present to actually start developing your own ideas about the future. And that is partly where education is important. That is also partly where engaging the youth is very important. And thirdly, that is where individual participation in local politics is also very important. In many of the western countries, most local people don't do any politics, they only vote once every four years. What you need to develop, and I'm asking you whether you see ways to do that, is to activate the whole of the population in a more political sense,

so that you actually end up steering your local future in the way you actually want to do it. So, I would like to know what your thoughts are about that possibility and that necessity. (今日私たちがしたことは、みなさん自身の将来の重要な要素について話してきたことだと思います。というのも、本当に重要で難しいことですが、島があるという事実とコミュニティがあるという事実は大きな利点であり、過去と現在において、将来について自分自身の考えを発展させるための基盤があるということです。そのためにも教育が重要だ。また、若者を巻き込むことも重要です。そして第三に、地方政治への個人の参加も非常に重要であり、西側諸国の多くでは、地元の人々は政治を行わず、4年に一度しか投票に行かない。そのために必要なことは、住民全体をより政治的な意味で活性化させることです。その可能性と必要性について、あなたの考えをお聞かせください)

池田 シャベっていいですか。

高橋 はい、どうぞ。

池田 池田がしゃべります。私は都会にいたので、例えば、区長とか都庁、その役職が高い方にお会いすることは

ほぼゼロ、皆無でした。都会の人は。ただ、島においては、町長と買い物の途中に会うこともありますし、議員さんと一緒にお酒を飲むこともあります。そういう部分で、本当にローカルは、個々が政治に自分の意見を述べやすい場所でもあると思います。実際に、漁業組合にいても、「組合長」と怒鳴って入って来る島の方もいます。海でのトラブルですとか、そういったことで、こうしたほうがいい、こういうふうにしてほしいというのを、実際にその場の長に対して、言いやすいとか、近くにいるので、できるので。これを教育と含めて、子どもたちも、また、そういう意見を言っていんだよという場をやはり、つくっていくこと。自分より、目上の人、先生であり、役場の方でありに、子どもたちも意見を言うてみるができるんだよっていう場をつくっていくことは、非常に重要なというのを今、感じました。そこから、町民たちも子どもの意見を取り入れ、みんなでこの島を良くしていかうという部分につながるのではないかなというのを、サンデル先生の提案から、私はそのように思いました。

高橋 ありがとうございます。南さんも役場の身分ではなく、ずっとこの島で生まれて育ってきた1人の「ゆんぬんちゅ（与論人）」という立場からで

良いので、幼い頃から自分の育った島をどのように作っていくのかという地域づくりに対して、どんな関わりを持ってきましたか。

南 この町をどうつくっていくか。

高橋 与論町は、字が幾つでしたっけ。

南 集落が9ですね。

高橋 小さい集落が九つあって、九つのそのそれぞれの集落の中に小字というさらに小さな集落があるのね。小字がいくつでしたっけ。

南 大量に。

高橋 約？

南 約？

池田 100以上になる・・・。

南 いわゆる小組合ですよ。いくつかな、9かける10以上ですから、100近くはあるんじゃないですかね。

高橋 集落が9あって、集落の下に小組合と呼ばれる、小さな地縁的な集団が100以上ある。それぞれがムラに関わる単位になって、お祭りごととか行

事とか、いろんなご近所の付き合いをしてるんですね。だから、政治といったときに、常的な関わりがベースになって、町というものをつくっているから、身近にあるのがここの集落の政治と個人の関わりの在り方だと思います。

サンデル I think what is really important in any community is that there is an official structure of communication which you have from the mayor to the assistant mayor and then all the way down. But the community works only well if there is also an informal way of communicating, and that is what you were referring to when you said, “Hey, mayor, this needs to be done.” So as long as you have both those communication structures, you are OK. The difficulty is, of course, that if you have very many people, most of those people cannot be part of the informal structure. And that is why it is so difficult for large communities to actually have a participating democracy in which individuals are engaged. In a way, when the old Athenians in 500 BC invented democracy, it was possible because it was a very small community. But by the time we had

this system for tens of millions of people, it just doesn’t work very well anymore. (どのようなコミュニティにおいても本当に重要なのは、市長から副市長、そしてその下に至るまで、公式のコミュニケーション構造があることだと思います。あなたが「市長、これをやってください」とおっしゃったのはそのことです。だから、その両方のコミュニケーション構造があれば大丈夫。難しいのは、もちろん、非常に多くの人がいる場合、そのほとんどの人が非公式の構造には加われないということです。そのため、大規模なコミュニティでは、個人が関与する参加型民主主義を実際に実現するのは非常に難しい。ある意味で、紀元前 500 年にアテネの人々が民主主義を発明したとき、それは非常に小さなコミュニティだったから可能だった。しかし、何千万人という人々が参加するシステムができた頃には、もううまく機能しなくなっていたのです。)

高橋 いかがでしょう。コミュニケーションの構造について実感しますか。

南 議員さんよりかは、集落の公民館長が強いというのがあります。

阿部 そうというのは、大事なことだね。

南 与論の特徴と言いますか、議会政治は民主主義なので、町民代表からなる議会があります。それとは別に、今、話してきた集落のまとめ役の館長さんという方がいらっしゃるって、それは9つの集落なので、9人いるんですけど。実際、地域のことを動かす上での実権を誰が持つてるかというときに、議会というのは、町全体が一つ大きな議決権ではあるんで、各集落の公民館長のほうが力があるのかもしれない。直接、住民の方が公民館長に、例えば、あそこの道が細いから、今度、道通してとか、あそこの、もうちょっと施設よくしてっていうのがよく話があります。そういったことで、実際問題、町民の方が関りがあるのは、この公民館長という各地域のコミュニティの長みたいな人が、実権を持つているということはあるのかもしれない。

その中で、うちだったら教育委員会や役場に、直接、「あっちのほうちょっとどうにかして」と言いに来る方もいるんですけど。そういったことは、小さい島だからこその、面白い形のコミュニティとかであるかと思います。そういうところで、直接じゃなくてもさまざまな形で地域のことを自分の意見で言う機会があります。それこそ政治参画といいますか。その中で若い人がなかなか各集落の集まりに来ないとい

う課題もあります。それはいろんな理由があるんですけどね。それぞれ仕事があったりとか、集落に対する思いだったりとか、いろいろと変わってきてるところもあるんですけど。それが今後、どうなっていくかというのがありますが、現時点では、そういった特徴があるのかなと思っております。

田村 すいません、田村ですけど、いいですか。

高橋 はい。

田村 今のお話お伺いしてて、与論の生まれ育ちの南さんと、与論の人と結婚して戻って来られた池田佳さんと、また、違うのが全く外から来られた佐藤さんなのかなと思うんですけども。全く外から来られた佐藤さんは、今の話について、どう思われますか。ご自身のご経験から。

佐藤 私はちょっと違った見方になるんですけど、私が与論島に入るきっかけになったのは、地域おこし協力隊という国の制度で、3年間移住して、役場で勤めました。外の視点から問題点に気付いて改革をする経験をしてきました。それで、非常に困ったことがたくさんありました。南さんが言ってるような公民館長や議会、いろんな役場

があるんですけど、町長、首長ですね、トップの人から私たちは特命や指示を受けてその課題を解決します。課題解決には、変革、変化が必要です。その変化に対して、変化をととても嫌うことがありました。それが一番の問題でした。その壁をいかに短時間でクリアするかというのが、本当に3年間に与えられた時間での課題でしたね。ただし、その問題を成果が出るまで、ものすごいストレスがかかるんですが、成果が出た瞬間に手のひらを返したように受け入れてくれるのが島の文化で。その1年間すごく苦しかったのに、1日過ぎただけで、全然、違う反応が返ってくる、というのを何度も経験しました。あの苦労は、なんだったんだっていう。

南 熱くなりやすく、冷めやすい。流れやすいという方もいますね。

サンデル And how do you change their minds? Do you do it by talking to individuals or do you do it by group activity? (どうやって彼らの考えを変えるのか? 個人と話すのか、それともグループ活動で行うのか?)

佐藤 例えば、いろいろな会議に出たときに、私は外来種なんですね。全く、違う立場、視点から考え方を述べるんで、島に住み続けている、決定権を持

つ人たちは、そんなこと考えたこともないんですよ。場合によっては、僕の話聞いて怒り出す人もいます。でも、その人は、最初、初日は怒るんだけど、2日目になると冷静になって考え始めるんですね。そうやって、時間をかけて繰り返し発言する、怒られる、発言する、怒られるをやっていると、だんだん私の立場からも考えや意見を理解してもらえるようになって。この文化に慣れるまで、最初は怖かったですね。会議のときは、みんな発言しないんです、与論の人は。その後にお酒を飲むと、みんなすごい発言をするんですね。すごいおとなしかった人がプロレス技をかけてくる、みんなね。ヘッドロックをされるんですけど。そのヘッドロックした人は、僕は怖いと思うんですね。けんか腰につかまれたりとか、怒ってきたり、向かってくる。でも、困ったときに一番、最初に助けてくれるのはその人たちだっていうことが分かって。そういうぶつかり合いが大事なんだなというのを学びました。

サンデル Exactly. (すばらしい。)

南 たしかに、やった本人は案外、覚えてないっていう。結構、覚えてない。気にしないですよ。

サンデル Thank you, that's very,

very interesting to put it that way. And I think that is the problem with a lot of the world right now. (ありがたい、それはとても興味深い。そして、それが今の世界の多くの課題だと思う)

阿部 今、サンデルさん、世界中で課題になってることで、僕たちというか、地球研とあとサンデルさん、そして、やはり地球研に関わりの深い、ステファン・グルンバッハと今やってることの一つが、日本の山村、具体的には宮崎県の諸塚村。ここも、先ほど公民館制度の話がありましたけど、自治公民館制度が非常に強いというか、公民館の力が強い所で。自分たちのことは、自分たちでという意識がすごい強い村です。その自治公民館連合会のトップの方と、そして、フランスの山村で、そのステファンさんが今、住んでる所で。われわれサンデルさんと一緒にその村長さんと村議会、村議会と言っても10人ぐらいかな、本当、若い人。そこで、自分たちのことは自分たちで。恐らく、いろんな形で制度的に国の政策とか来て、それらが決して全てが、もちろん国民のためという名目ですが、地域的な文脈の中では、むしろ、そんなことは余計なお世話だっていうこともいっぱいある。その中で、自分たちが自分たちの問題を自分たちで解

決するということをやってる。そうしたら少し、その間でいろんな交流ができれば、あるいは、そこで具体的にやってることをこういう形でもっと広く、広げることができる。今、話を聞いてて、与論は間違いなく、そういったところで一緒にやれることができそうな感じが強くいたしますね。

サンデル Knowing the situation in France that Abe-san is referring to, there is a very important aspect to that. And that is the nature and the qualities of the mayor of the village. There are thousands of villages in France where this is not happening. He is a real leader and he has been re-elected as a leader because he has the ideas to change the situation. And I think that aspect of leadership is something that you also need to consider in your own communities. You need to elect the people who are the best at doing that. And one of the great advantages of a small community is that you know everybody and you know who is good at what. When you have a very large community, most people get elected without anybody knowing what they're worth. And I think that is one of the big problems

with democracy at the national level that a lot of people that are elected are very mediocre and are not really people to whom you should or could be entrusting the fate of others. So, the leadership is what I just want to accentuate that because Abe-san came up with this example in the south of France. And that man is really unique. He is very special. And that gets us to the whole topic in democratic systems of leadership. And I think that you have the opportunity here because the community is small and everybody knows everybody, to actually choose the right person for the right job. And that's not something that happens in most places. (阿部さんが言及しているフランスの状況を知っていると、それには非常に重要な側面があります。それは、その村の村長の性質と資質です。フランスには何千もの村がありますが、そこではこのようなことは起こっていません。彼は真のリーダーであり、状況を変えるアイデアを持っているため、リーダーとして再選されました。そして、リーダーシップのその側面は、皆さん自身のコミュニティにおいても考慮する必要があることだと思います。それを最も得意とする人々を選出する必要があります。そ

して小さなコミュニティの大きな利点の一つは、皆が全員を知っており、誰が何を得意としているかを知っているということです。非常に大きなコミュニティでは、ほとんどの人が、誰もその価値を知らないまま選出されます。そして、それが国家レベルでの民主主義の大きな問題の一つだと思います。選出される多くの人々が非常に凡庸であり、他者の運命を託すべき、あるいは託すことができる人々では本当にないということです。

ですから、リーダーシップは、阿部さんが南フランスのこの例を挙げたため、私が強調したいことです。そして、その男性は本当にユニークです。彼は非常に特別です。そして、それは民主主義システムにおけるリーダーシップという全体的なトピックにつながります。そして、コミュニティが小さく、皆が全員を知っているため、実際に適切な仕事に適切な人を選ぶ機会がここにはあると思います。そして、それはほとんどの場所で起こることではありません。)

高橋 ありがとうございます。私から質問なんですけども、小さなコミュニティとリーダー、あるいは、リーダーシップが大事だというお話に関連をして、小さいコミュニティとは、私たち

研究者にとっては、「研究プロジェクトチーム」というのがあるかと思います。特に地球研のプロジェクトでは、トランスディシプリナリティ研究、研究者だけではなくて、さまざまな分野の研究者と研究領域の人と、あるいは、地域の方とかさまざまな方たちと一緒にある一つの問題を解決する研究を、一緒に設計し、実践を目指しています。そういった協働研究のリーダーシップをとる上で、サンデル先生がこれまで大切にされてきたことは、どんなことだったかを教えていただきたいと思いました。

サンデル I think that is very valuable. I also think it is very difficult because identifying leadership qualities is not so easy. You have to know somebody really well. You have to have a good sense of where the community wants to go. The person who is the leader also has to be very balanced and able to work for everybody so that you don't get big conflicts in the community. So, I think getting a sense of the leadership and how leadership plays a role in all of this is indeed absolutely fundamental. But I am still not sure in my own mind in how far scientific research can actually identify those people. I think

a lot has to do with intuition, and of course intuition is not something that you can use in a scientific sort of accepted method. And so, I have my doubts there, I just don't know. But I do know that communities where everybody knows everybody and knows who is capable at doing what is actually very interesting.

I am reminded through Annick, my wife, of an experience we had in Papua New Guinea among the Papuas. They had built a house and they had a party, and they had cooked meat for everybody and vegetables and things like that. And then suddenly, a big debate broke out, and about four or five men sort of started shouting. And we asked, "What is going on?" And it was very interesting because all these men were proposing how they would deal with a particular problem. In this case, how to keep the airfield grass from growing too high. And then after a debate, ultimately one of the people convinced everybody that they had the best idea. That is something we don't see in western Europe. We don't see but you could have it here. You could raise a question and then have a public debate, and then for people to decide what is the best idea. So, there

are ways to do this, but it remains a very, very difficult terrain. (とても価値のあることだと思う。また、リーダーシップの資質を見極めるのはそう簡単ではないので、とても難しいことだとも思う。誰かをよく知らなければならない。地域社会がどこに向かいたいのかをよく理解していなければならぬ。また、リーダーとなる人物は、コミュニティ内で大きな対立が起きないように、非常にバランスが取れていて、みんなのために働ける人でなければなりません。ですから、リーダーシップと、リーダーシップがどのような役割を果たしているかを理解することは、本当に基本的なことだと思います。しかし、科学的な研究がどこまでそのような人々を特定できるのか、私自身はまだ確信が持てない。もちろん、直感は科学的に認められた方法で使えるものではない。だから、私はそこに疑問を持っている。でも、みんながみんなを知っていて、誰が何をできるかを知っているようなコミュニティは、実はとても面白いんだ。

妻のアニックを通じて、パプアニューギニアのパプア族で経験したことを思い出しました。彼らは家を建ててパーティーを開き、みんなのために肉や野菜などを料理した。すると突然、大論争が始まって、4、5人の男が叫び始めたんだ。私たちは“何が起

こっているんだ？”と尋ねた。とても興味深かったのは、すべての男たちが特定の問題にどう対処するかを提案していたことだ。この場合は、飛行場の草が伸びすぎないようにするにはどうしたらいいかということだった。そして討論の末、最終的に一人が自分たちの考えがベストだと皆を納得させた。これは西ヨーロッパでは見られないことだ。西ヨーロッパでは見られないことだ。問題を提起し、公開討論を行い、何が最良のアイデアかを人々が決める。このような方法がありますが、非常に難しい分野です)

高橋 ありがとうございます。あと、残り 10 分ぐらいですが。

田村 質問してもいいですか。

高橋 もちろんです。

田村 田村ですけれども、これはサンデルさんに質問なんですけれども。与論では、コミュニティがしっかりしていて、それがいいところだとおっしゃいましたよね。でも、それは同時にコミュニティがしっかりしてるからこそ、佐藤さんみたいなよその人が変化を起こしにくいという、バリアの面もあると思うんですよ。こういう世の中の変化が早い時代に、コミュニティ

がしっかりしていることと、でも、それが変化に対するバリアになってるということをどう考えたらいいんでしょうか。

サンデル My first question is does anything have to be done? Most of the western world, and actually most of the world nowadays, after colonization and globalization has all become addicted to progress. They want progress everywhere. Now it's very clear that a little bit of progress sometimes can be OK, but to have progress all the time everywhere is just going to lead us into totally unsustainable societies. And so, my question is that we need to reevaluate the importance or the desirability of progress.

It's very interesting that many politicians that I encounter when we talk about climate change, say, "Technology will solve the problems for us." But what they forget is that two and a half centuries of technology has got us into the problem rather than out of it. We are completely focused on ever having more, having better, having new, and so on. And for very many, many centuries, millennia in different societies, that has not

been so extreme. There have been changes, of course. There have been local changes, there have been wider changes, but those changes have been slower. And one thing that is interesting in this respect is that now, the people in information technology, they say they have a new major invention every five years, but that it takes the society about 15 years to get used to it. So, if you keep innovating every five years and it takes 15 years for every innovation to become understood, then you run into very big trouble.

And so, I would think that that whole process of accelerating and more progress and more quicker and so on is not a very good idea. I think it is one of the big problems behind the UN's sustainable development goals because those goals were devised from the western perspective of progress. And trying to promise all societies on earth to be part of that progress, that is simply not possible. The earth doesn't have those resources. So, an important part of changing our mindset is not focusing on that kind of progress, but accepting stability. Accepting that things for long times stay more or less the same. (私の最初

の疑問は、何かしなければならないことがあるのだろうか、ということです。植民地化とグローバリゼーションを経て、西欧諸国、そして現在では世界のほとんどが進歩中毒に陥っている。どこまでも進歩を求める。しかし、どこでも常に進歩を求めることは、私たちをまったく持続不可能な社会へと導くだけです。つまり、進歩の重要性や望ましさを再評価する必要があるのではないのでしょうか。

気候変動について話すとき、多くの政治家に出会うのはとても興味深いことです。彼らは「テクノロジーが問題を解決してくれる」と言う。しかし、彼らが忘れてるのは、2世紀半にわたるテクノロジーによって、私たちは問題から脱却するどころか、問題に巻き込まれているということです。私たちは、より多くを手に入れること、より良いものを手に入れること、新しいものを手に入れることなどに完全に集中している。しかし、何世紀も、何千年もの間、さまざまな社会では、それはそれほど極端なことではなかった。もちろん変化はあった。地域的な変化もあれば、より広範な変化もあった。この点で興味深いのは、情報技術に携わる人々は、5年ごとに新しい大発明があると言いますが、社会がそれに慣れるには15年ほどかかるということです。つまり、5年ごとに技術革新を

続け、すべての技術革新が理解されるまでに15年かかるとしたら、非常に大きな問題に直面することになる。

そのため、加速度的に進歩を遂げ、より早く、より速く、といったプロセス全体があまり良いアイデアではないと思います。国連の持続可能な開発目標の背後にある大きな問題のひとつだと私は考えています。そして、地球上のすべての社会がその進歩の一部になることを約束しようとしている。それは単純に不可能だ。地球には資源がないのだから。だから、私たちの考え方を変えるために重要なのは、そのような進歩に焦点を当てるのではなく、安定を受け入れることです。長い間、物事が多かれ少なかれ同じままであることを受け入れることだといえるでしょう。）

阿部 田村さんのレスポンスを聞いた後、僕が話しする。

田村 いいですよ。どうぞ先。

阿部 サンドルさん、ありがとうございます。サンドルさんが今、西洋的な進化に決して日本が別にまねする必要ではないよというようなことをおっしゃいました。それに……。大丈夫？

高橋 いいです。どうぞ続けてくださ

い。

高橋 あ、オンライン参加している安溪先生が、農産物が採れましたとおっしゃっている。

阿部 安溪先生！

高橋 進めてください。あと、ちょっとしかないの。

阿部 西洋的な考え方というところで、例えば、僕ら今、コミュニティと言ってます。われわれ、サンデル先生と宮崎県の高千穂町に行くことが何度かあって、そこで高千穂神社の宮司さん、後藤宮司、日本の神道で一番、今、トップクラスの神官の方ですけど。その後藤さんがおっしゃった言葉を思い出しました。それは、何かというと、コミュニティと、欧米でコミュニティ、西洋でいうコミュニティとそこで生活してる人が、言ったらメンバーシップ。メンバーシップの問題を少し触れたいと思います。実は、日本でコミュニティといった場合は、そこで生活している人間だけではないんですよ。そのコミュニティのメンバーには、自然も含まれてるよ。それはカミと言ってもいい。コミュニティのメンバーには、カミも含まれてるんだと。これが長続きする、やはり西洋とは違う日本のも

しかするとコミュニティの意識かもしれない。そして、それがわずか3日ぐらいの滞在ですが、与論ではかなり強く残ってると思いました。

南 つながりでしたら、祖先たちのお墓とかもですね。

阿部 お墓もそうですね。祖先のことが常に身近なコミュニティのメンバーとして意識されてる。恐らく、そういった中で、外の人間というのもそこにはないけど、いや、たまにしか来ないけど、あるいは、外から来たけれども、佐藤さんなんかそうだと思う。コミュニティとして徐々に受け入れられていく。こういう少しコミュニティのメンバーシップというと、少し堅苦しくなるかもしれませんが。自然の祖先の人たちの自分たちが今のコミュニティのメンバーだと思えることが、とても大切なのではないだろうかと思いましたね。そのことを思い出しました。以上です。

田村 それも含めて、受け入れてものみ込めるぐらいの小さな変化は必要だけれども、大きな変化に無理してついて行かなくてもいいということかなと思って聞いてたんです。それは、ある意味では、阿部さんおっしゃるように、コミュニティのメンバーである自然が

ついていけないような変化は、例えば、受け入れられないのかもしれないとか、そういう感じなのかなと思って聞きました。

阿部 ちょっと祖先に顔向けできないな、こんなことがという考え方自体も大事かもしれません。

池田 日本独特なんですかね、これは。

阿部 どうなんでしょうね。もしかしたら、もうちょっと広い範囲かもしれない。

佐藤 すいません、私、いろんな国の方をガイドして感じるんですけど、人間の考え方の多様性とか違いが変わってきているのではないかと。今、若い世代であればあるほど、国が違って同じような考え方になっているように思います。だけど、与論の中で会議をすると60代から20代、10代まで入って会議すると、そっちのほうが海外の人と話すより価値観が遠いんですね。例えば、僕はなんで会議で、けんかになるんだろうというのを1年間ぐらい考えたときに、同じ単語を使うんですけど、その単語に考えている歴史的背景や考え方が違うんですよね。「地域活性化」という考え方が、50～60代は高度経済成長で工場を誘

致して、雇用を増やすだったりするんだけど、われわれの考える「活性化」は、移住者が増えて、自分で小さい事業を起こし多様性を持たせることだったりする。同じ活性化なのに、全然違う意味として伝わるのがケンカの原因だったんだ。だから、私が考える活性化は何かとか、みんなの考える活性化は何かというのを発言する前に言葉の定義を整えないといけない。それを考えずに分かるだろうと思って発言すると、大きいミスコミュニケーションが起きるということが分かって。まず、その言葉とかそういう距離をもっと測らなければいけないなというのは、自分の7年間の一番、生きた経験でした。以上です。

池田 そうかもしれないね。

サ ン デ ル One of the interesting things for me in Japan is to see this very big difference between the industrialized Japan that once progressed that is all about technologies and the kind of Japan that we have seen here and that we have seen with Abe-sensei in other places in Japan, which is the rural Japan which has a very different culture, I think. And that I think, is part of what this debate is all about.

I think there is a part of the society, in particular, the business society, and lots of the politics that really do believe in progress and sometimes in ways that I think are immeasurably stupid. The one example that I think is totally beyond me that they even thought about it is this whole big sea wall that they built around northern Japan which closes off the land from the sea, the fisherman from the cultivators and which makes that you can't even see the sea anymore. I think there would've been much less money if they had moved the settlements a little bit higher up the hill. But that is how politicians think and it's not up to me to criticize them in that sense, but it is to me to express my amazement at what has happened (日本で興味深いことのひとつは、かつて先進工業国として発展し、テクノロジー一辺倒だった日本と、私たちがここで見てきたような日本、そして日本の他の場所で阿部先生と見てきたような日本との間に、非常に大きな違いがあることです。それが、この議論の本質の一部だと思います。社会の一部、特にビジネス社会と政治の多くは、本当に進歩を信じていて、時には計り知れないほど愚かだと思うようなことをする。例えば、東北地域の

海岸を取り囲むように建設された大きな防潮堤は、陸地と海、漁師と耕作地を隔て、海さえ見えなくなっていました。集落をもう少し丘の上に移せば、もっとお金はかからなかったのではないだろうか。しかし、それが政治家の考え方であり、その意味で政治家を批判するのは私の役目ではない)

田村 与論の皆さんにお伺いしたいんですけれども、30年後、与論はどういうふうになったらいいと思いますか。

高橋 私、生きてるかな。与論生まれの与論育ちの南さん、いかがですか。

南 30年後ですか。そうですね、30年後。どうですかね、30年後。

高橋 幾つ？

南 ちょうど60才になります。定年する前ですかね。

高橋 定年する前か。自分の仕事のまじめにかかるぐらいの年ですね。

南 ですね。今やってることを誰か継いでくれたらいいですけどね。いい形で。

高橋 次の後輩を育てたい。

南 今やってる島の歴史を掘りおこす仕事を、もう少し、ちょっといい形で進めたりとか。もっと新たなことが分かったりとか。魅力がもうちょっと歴史や文化の面で、今以上に進んで欲しい。そういった意味で「与論ってそういうのが面白いよね」と言ってくれるような人が増えてもらってるといいかな。

高橋 いいですね。

池田 つまりは、変わらないでほしいというのはないですか。何と変わらないのかの比較は違うと思うんですけど。結構、昔に比べて変わってはきてると思うけれど、変わるんであれば、さっきも言ったようにゆっくりした変化のような変わり方で。むしろ、元に戻っていくような。牛飼いさんの話を聞いたときに、これ以上、牛はもう増えないと思うよとおっしゃっていました。もうキャパシティがいっぱいになってる。また、今度は畜産だって、違うものが出てくるかもしれないけれど。結局、この小さな島の中で、ちょっとした変化を、ゆっくりと変化していくというような与論のままであってほしいですね。

南 後ろには下がってほしくないですね。いろんな意味で。

池田 さっき佐藤さんも言ったように、リピーターの観光客の方が多いのは、何かあったときに帰る場所であることだと思いました。「何かあったらここに帰ってきますね」と、私の知り合った観光客の方とか友達もいます。つらいことがあったり、悲しくても帰る場所があるから頑張れるというような、そういう島のままであってほしいなという部分はすごくありますかね。

南 どうですか。30年後？

佐藤 私は、いろんな奄美沖縄の島々のガイドと月1回程度ミーティングしてるんですけど、与論より小さい規模の島で、移住者と先住者のバランスが崩れちゃって、逆転しちゃった島があるんです。移住者の人たちが、人口減少とともに先住者が培った消えていく島の文化と自然に対する知恵をどうやって維持させるかというのを、移住者だけで考えてるコミュニティがある。「与論は、どうしてるの」と質問をされたことがあるんです。この与論らしさというのが保たれるためには、変わらないためには、適度な変化が必要だと思っています。ちょうど移住者と島の人が半々ぐらいの感じで。僕は、

まだ、島の人のパワーが強いなと思っていますが、ある程度、外からの変化を取り入れつつ、自分たちの文化を維持するというのが、僕は持続可能な地域を作るための必須条件だと考えています。

池田 気付きを与えてもらわないと、当たり前への価値観は変わらない。海はきれいなのが当たり前。だから、海にごみなんか捨てても、またすぐきれいになるよというようなおじいちゃん世代のときは、きれいになった、確かに。ごみも少ないし、ごみの物質が違うから。けれど、都会から来たら、そんなもん海に捨てちゃ駄目でしょとか、そんなもの取っちゃ駄目でしょっていう、そこで小さなぶつかり合いとか変化は起こるけど、気付きにはなるのかなとは思いますね。

高橋 ありがとうございます。そろそろ、最後なんですけど、最後にぜひ、サンデル先生にこういった島で頑張っている、それぞれの仕事、それぞれの役割をしている人たちにエールをいただきたいなと思います。ゆっくり、まだ時間あるので、エールください。

サンデル That's not so difficult. It's your future, so you better start thinking about it and coming up with

good ideas for it, and then you need to get people involved politically to actually realize those ideas. All of that is a heavy task, but what you will find if you've done it, it is also incredibly satisfying. That is why I would encourage any young people who have a whole long life before them and who have to live that life in the circumstances that they themselves have created, to actually think about how they see their life in the future. And there are some tools that we can find to help you with that. I'm not going into that right now, but there is work going on on helping people to think about their own future. And I think that might be something that we can talk about after this session in a more restrained fashion.

So, I thought this session was a really interesting one. I learnt a lot. I hope I also was able to word some of the ideas that you were thinking about and I want to end, again, with thanking all of you for having a session like this, and we were miraculously blessed by the technology that did work, which in itself is not so often the case. And so, the whole trip that we had for the last couple of weeks, Annick and myself, and the

discussion that we had today, I think we were very, very rich and enriching, and I wish you all the best in pursuing those kinds of ideas. (それはそれほど難しいことではありません。自分の将来のことなのだから、それについて考え始め、そのための良いアイデアを思いつき、そのアイデアを実際に実現するために政治的に人々を巻き込む必要がある。そのすべてが大変な仕事だが、やってみればわかるが、非常に満足感のある仕事でもある。だからこそ私は、これから長い人生を歩む若い人たち、そして彼ら自身が作り出した状況の中でその人生を生きなければならない人たちに、将来の自分の人生をどのように考えているかを実際に考えてみてほしいと思う。そのために役立つツールがいくつかある。今はそれについては触れないが、人々が自分自身の将来について考えるのを手助けする研究が進んでいる。それは、このセッションの後に、話の続きをしましょう。

このセッションは本当に興味深いものでした。多くのことを学びました。そして、このようなセッションを開いてくださった皆さんに、改めてお礼を申し上げ、終わりにしたいと思います。妻のアニックと私は、そして今日のディスカッションは、とても豊かで充実したものだったと思います)

高橋 ありがとうございます。

サンデル Thank you.

高橋 ありがとうございます。襖、開けましょう。これで終わりますけれども、今、こんな状態になっています。見えるかな。こんな感じでした。私たち、与論の居酒屋「ひょうきん」をお借りして、お届けしてきました。では、これにて今年度、最後、3月の井戸端勉強会を終了いたします。皆さま、ありがとうございます。

田村 ありがとうございます。失礼します。















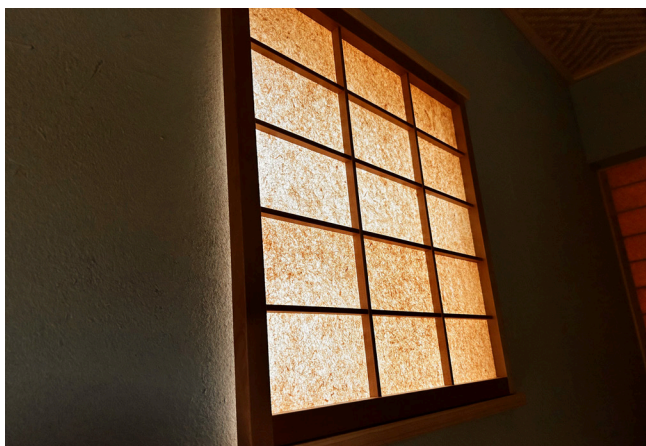






















フィールドダイアログ 02

植物と水と手仕事と
—沖縄県大宜味村・今帰仁村にて

February 11, 2024

高橋 では、ゆくりと始めましょうね。皆さん、今日のご参加いただき、ありがとうございます。琉球大学の高橋そよと申します。バックグラウンドは人類学です。今日のフィールドダイアログですが、実は、それぞれ初めてお会いした方ばかりです。なぜ、こういうことになったかという経緯を、私から少しお話ししたいと思います。私とフランスからお越しのフレドリック先生は、京都にあります、総合地球環境学研究所という、地球環境問題を人間と自然との関わりの中から考える、日本の国立研究機関の共同研究員でもあります。

今回のダイアログは、この研究機関の自然の恵みを生かし、災いを避ける地域文化研究を再考し、これからの暮らし方の未来を考えるプロジェクトの一環として企画しました。今回は「植物と水と手仕事をめぐる旅」をテーマに、研究者だけではなく、建築家や草木染作家という異なるバックグラウンドを持つ方々と一緒に、沖縄のやんばるをフィールドワークしながら、植物や水、土地などと、日々どのように向き合いながらお仕事をされているのかを語りました。午前中には kitta さんの案内で大宜味村の滝を訪ね、その後、kitta さんの素晴らしい工房に立ち寄りました。そこで、Kitta さんのお仕事を拝見しながら、琉球藍を発

酵させる工程についてお話を伺ったり、植物素材から生まれる色の豊かな広がりを紹介いただきました。午後には本部町にある琉球藍の畑と藍壺を見学しました。その道中で、私たちはいろんな話をしました。

今回、私たちは初めてお会いしましたけれども、一緒にフィールドワークをしながら、共感し合う部分がたくさんあることに気づきました。一つは、私たちは自然の価値というのに多様なものを見出しているということ。そして、自然と人との関係性は、目に見えるものだけではなく、目に見えない世界との関わり合いによって成り立っていることに関心を持っていること。具体的には、自然に対して、食糧をはじめとする、衣食住のような人間にとっての実利的な価値だけではなく、恐れや信仰の対象となるような世界観を支えるものとして、人間の文化に深く根付いてきた自然の価値の多様さに敬意を持っていることだと思いました。今日のフィールドダイアログでは、このような意識を持つようになった皆さんの経緯と問題関心、そして、そこから自然と人との関わり合いの未来を考える上で、ご自身の仕事の役割や、「働く」ということををどのように考えているのかを伺いたいと思っています。

それでは、まず初めに皆さんに自己

紹介をしてもらいたいと思います。そして、ゆっくりそれぞれ聞いてみたいことを聴き合うフリースークとしましょう。時間は2時間ぐらいで、きつと足りなくなってしまうと思いますが、まずはそこまでで1回目の会を締めるとい形にしたいと考えています。それでは、みなさん、よろしくお願いします。まず初めに、この素晴らしい宿をデザインされた山口博之さんから始めましょう。

建築、自然、そして、労働

山口 山口博之と申します。あらためて、本日は、会場をお貸しくださった「今帰仁 石路」さんと、本日の宿泊者である、早野洋介さん、ありがとうございます。それでは、簡単にですが、私の沖縄においてのプロジェクトを紹介したいと思います。テーマを今回のフィールドダイアログに合わせ、「建築、自然、そして、労働」とし、高橋さんの問いかけである「働く」ということに重ねていけたらと思います。僕は、2006年、今から18年前に沖縄に来ました。その前は、京都精華大学という美術系の大学を卒業後、ものをつくることに興味があったので、京都で大工修行をしていました。その上で、18年前に沖縄に来て、建築家として独立したわけですが、自分で設

計して、自分で大工するというやり方を、自分の仕事の方法としてきました。

これが、沖縄に来て初めてのプロジェクトです。この頃、沖縄では、ほぼ90%、コンクリート造の建物でした。沖縄で木造住宅や、木造の建築を造るための流通というのが、全くない状態でした。だから、自分の大工の経験を生かし、どこで材料を買うかとか、何を準備するかということから、考えなくてはいけない状況でした。その中で、完成させたのがこれですね。これ、20年前の僕ですけど、このように大工仕事をしながら、そこにある材料で造っていきました。そのときに学んだのが、沖縄で建築をするためには、何を造るのかではなく、どのように造るのかということを自分のテーマとすることでした。どのように造るのかということが、僕の建築の提案になればいいかなと思ってます。

次、これが読谷で造ったプロジェクトです。これは、クライアント、お施主さんが、庭師、庭を造る人なんですけど、彼からのリクエストは、自分自身で自分の家を造りたいという提案でした。この時のプロジェクトでは、素人は建物を造ることができないという疑問に対して、発想を転換させて、素人でも建物を造ることのできる設計の在り方、つまり、何を造るのかじゃなくて、誰でも造れる建物の造り方とい



うことを考えて、設計しました。僕が大事にしてるのは、設計を計画し過ぎない。造っている最中に、いくらでもアレンジができるように、造りながら考えるというスタンスを大事にしてみました。

これは僕のスケッチなんですけど、これは現場で、大工さんと3時の休憩、ティータイムを取りながら、じゃあ、次何しようか、こうしようか、ああしようかっていうのを話しながら造っているところです。これは、この庭師の奥さまは、陶芸家です。陶芸家で、土を掘ることができたので、その土を使って、外壁をみんなで塗っているところです。

これも、読谷の住宅の、別荘のプロジェクトですね。この木材は、インドネシアで加工して持ってきた、マホガニーという木です。これもそうですね。沖縄は15世紀から16世紀頃、当時のシャム王国であるタイやインドネシア、マレーシアなどの東南アジア地域と、交易をして栄えた王国でした。この住宅を設計する際、その歴史性や、沖縄と東南アジアの建築文化を思い起こしました。これが沖縄の家ですね。これがインドネシアのジャワ島の家。沖縄の家とジャワ島の家、とても似ています。だから、沖縄の文化を考えたときに、日本の南端ではなくて、広く海洋アジアの北端と捉えたときに、何

ができるのかな。そのときに、インドネシアの木材や、インドネシアの職人さんたちと一緒に家を造っていくということが、文化的にも、気候的にも、沖縄の建築を造ることに馴染むのではないかということを考えました。これは僕がインドネシアまで行って、木を買い付けて、指示をしながら向こうの職人さんと一緒に造っているところです。家具や窓を、向こうで創りました。

最後に、ここ、「今帰仁 石路」さんです。2022年に完成したプロジェクトです。ここは、森でした。僕は、ここが森だったときから、何回も行き来しながら、木の名前を調べたり、ここで昔、何があったのかという、地域史を調べながら、計画を立てていきました。このようにして、木、一本一本に印をして、この木は何の木だということを調査しています。これがその計画中のですね。このプロジェクトでは、クライアントである新見ご夫妻とともに、ずっと仕事をしてきました。これは焼き杉をしている最中の写真ですね。これは手前がうちのスタッフ、大工、奥が新見さんです。

このプロジェクトを通じて、クライアントが大工の弟子入りをするという状況が生まれています。これがその焼き杉をしているところ。これ、奥さまの写真です。材料調達は奥さまの仕事で、材料を一本一本、このようにして、

自分たちの目で、何に使うかということを確認めながら、一緒になって造ってきました。僕ら、最近なんですけど、図面をほとんど描かなくなってしまうと、本当に大きな概要の図面だけ描き、あとは、現場で、職人と話しながら、その場その場で決めていく。お施主さんも含めて、一緒に造りながら、現場で決めていくという、やり方をしています。このようにして、大工の棟梁と常に、現場で話しながら、どういう納まりがいいか、どんな材料がいいのか、そうすることによって、造りながら、そこで発見した材料だったり、そこで発見したアイデアというのが、現場の中で行われていくこと、誰かがトップに立って、誰かが決めるのではなくて、常に現場の流れの中で決まっていくということを、大事にしています。

分業というのが解けていく

これ、すごくいい写真だと、僕は思っているんです。僕のスタッフは大工で、右ににいるのも大工で、帽子をかぶっているのが庭師、左と右も大工なんですよ。だから、だんだん、ここの現場を作り上げていく中で、それぞれ分業されていた、デザイナーだったり、カーペンターだったりというのが、みんな最後、庭を造るという方法になってきて、だんだん、分業というの

が解けていく。施主と設計者がなくなっていく。そして、その中で、建物が完成というのが、いつなのかというのが、ちょっと分からない状態になっていく。そういう建築の在り方というのが、われわれにとっての仕事の在り方かな。こうやって常にみんなで、風景の中で、労働していく。自然の中で、労働を積み重ねていく。これ、誕生日の時の写真です。それが私たちにとっての、大事な在り方だと思って。この写真もすごくいいなと思っています。後ろにヘゴがあって、その下でわれわれが話をしているということです。

最後に、お伝えしたいのが、ちょっと強引にまとめますが、3つのプロジェクトを通じて、私が着目したいのは、「労働」なんですね。建築を造るという行為を通じて、人間が土地につながりを求めていく。人間が土地に働きかけを行うということと同時に、ここでずっと仕事をしていると、土地や風景が、どんどん人間に働きかけてくれるんですね。その相互的なこと、人間が自然に語りかけるのではなくて、同時に、自然が人間に語りかけていくという、コミュニケーションがある。このような関係性があることによって、建築は成り立つと思っています。だから、そういう土地と人間が一体になっていく感覚、無言だと思っている「自然」というのが、さまざまに私た



ちは話しかけられているということ、それをどうやって拾っていくか、どうやって耳を傾けているのかというのが、僕の仕事だと思っています。

だから、僕にとって、建築家の役割というのは、何かコンセプトを与えて、自分の思想をもたらすとか、論理をもたらすというのではなくて、それは近代という時代を通じて洗練されてきたやり方だと思うのですが、一方で、僕が信じたいのは、もう一つの建築家の役割、つまり、見いだすこと。人や人々、土地に対して、耳を澄まして聞き役に徹すること。そして、それぞれの営みの関係性を見いだすこと。そして、それを通訳、トランスレーターというか、媒介者としての建築家像、それが私にとっての、建築家としての役割だと、考えています。以上です。

高橋 ありがとうございます。まさに、関係性をどう見いだすかというのが、今日いる全ての人が共通することかなと思いました。詳しくは後ほどに。ありがとうございます。順番に、次、橘田さん。よろしいでしょうか。

自然と人を媒介する

橘田 沖縄で染色をしています、橘田と申します。全部、植物の色、先ほど、山口さんからこっちにつながったなっ

て思ったのは、私もずっと、自然と人を媒介するというテーマ、コンセプトで、自分の作るものを制作してます。染色っていうのは、それこそ、水を媒介として、植物のもとと持っている、目に見えてないものを、水を媒介として、目に見える形として現出させるみたいなのが、染色の一つのプロセスだと思ってらんですね。それは、さっきのお話からの続きだとして、ちょっと私の話をさせてもらいます。もともと、瀬戸内海を望む、明石という町で生まれたんですけど、そこが海辺の町だったんですね。毎日、海と空が、家の目の前から、200度ぐらい見渡せるところで育ったんですけど、なので、ずっと瀬戸内海って、鏡のように平らな水面をしていて、そこに空が映り込んでいる。毎日それを見ていて、自分の中の美しさというものの物差しが、自然の色というので出来上がっていったんだと思います。成長していくにつれて、多分、自分がこの世界で美しいなと思うものが、自然の色以上に美しいと思えるものを見つけられなかったんだと思うんですね。そんなふうに、自分は色を扱う人なんだ、色のことをやりたい、みたいなのところから、自分の服を自分で作って着てたりしたのもあったんですけど、染めてみようみたいなことが始まるわけなんですよ。

それが1998年ぐらいに、自分の服

を自分で作ってる中で、既製の服の色だとつまんないなって思い始めて、染色っていうのを自分の制作の中に入れてみたんです。制作といっても、ただ、自分が着るものを作ってただけなんですけどね。でも、気に入ってる色のものが売ってない、なんか違う。最初、化学染料で染めてみたんですけど、そのときに、排水が気になっちゃって、自分の小さな東京のマンションの一室で染めてたので、排水がすごい気になってきて、これ、どうしたらいいんだろうって思ってる頃に、草木染ってあるよねと思い当たったんです。その頃って、まだ、植物染色の服というのは、おじいちゃん、おばあちゃん、一部の趣味の人が着るようなものしか、流通してなかったんですよ。全然なかったのね。なんか地味な色しかないのかな、草木染ってと思ったときに、十二単の色を思い出したんですよ。染まらない色って、ないんじゃないかなと思って、私はこれをやってみようというところから始まって、そう思うとやっぱり、化学染料以前って、全部自然の色なんですよね。どの文明も全てが、文明前から、そういうふうに、色というのは自然のものから抽出されたわけで、出ない色はないということ、私がやるんだみたいになって、自分の服を植物で染めて、作り始めました。

98年に始めて、仕事としてやり始

めたのが2000年代、2002年、2003年ぐらいから、植物染色で、こういう着る物を作り始めていました。千葉の鴨川というところで。まきの火の煙を使って、まきで染料を煮出して、できるだけ自分たちで染料も採取したり、そういうふうに制作をしたかったので、自分たちは田舎にしか住めないなと思っていました。千葉の鴨川というところで、まきを使って染色をしたりとか、藍の栽培もちょっと始めたりとかしてたんですけど、2011年に東日本大震災が起きました。そのときに、自分たちの使っている染色とか、暮らしの土台になる、水とか、土とか、空気とか、そういったものに対して、疑うということが生まれちゃったんですよ。こうやって、当たり前だと思ってたものが、吸っていいのか、この水で染めていいのかっていうふうに、疑問を持ちだしたら、これをこのまま、ここで続けていくよりは、いったん、離れようと。2011年に震災が起きて、割とすぐ、2カ月後ぐらいに、沖縄に引っ越してきました。

沖縄に引っ越してきて、それまでずっと、染料の自給っていうことを、自分たちはやりたいなと思っていたところに、偶然、先ほど、フレドリックさんをご案内した、藍の畑と、何百年もそのまま使われてきた藍のつぼの場所があるんですけど、染料を作る場所

ですね。そこに出合って、ちょうど、そのオーナーっていうか、そこで染料づくりをなりわいにしてらっしゃった、おじいちゃんとおばあちゃんが、もうこのお仕事は辞めるというふうにおっしゃったので、それを私たちは、タイミングとして出合ってしまったので、どうにかつなぎたいって、やっぱ、思ったんですよね。私たちの世代って、何万年っていう中で、人間がつかないできた知恵だったりとか、技術みたいなのが、どんどん消えていく時代にきていると思っていて、これ、目の前に来たとし、私たちがここで、このことをやるってならなかったら、この技術すら消えてしまうんだって思ったら、もうやるという選択肢しかなかったし、そこで琉球藍の栽培っていうのは始まりました。

その後、こうやって服を作ってたんですけど、やっぱり、服って、物なので、服に耐久性だったりとか、できるだけ色が長く持つとか、機能がやっぱり、重要視されるので、この制作の後、私は、インスタレーション、空間作品の制作に入っていくんですけど、そういうものを作ろうと思ったきっかけというのが、沖縄に来て驚いたのは、これ2016年から始めたインスタレーションの制作が、スライドショーで流れるはずなんだけどな。どうかな。映らないかもしれないな。まあ、よしに

する？ちょっと動かないね。スライドショーが。ごめんなさい。取りあえず、映像を流しておきます。沖縄に来て、とても驚いたことが、私、本土に住んでるときから、もちろん自然というのが、自分の美しさの軸だったっていうのは、さっきお話ししたんですけど、沖縄に来たときに、自分の知ってる自然という概念を越えたような、何か野生という言葉のほうがふさわしいような、スケール感の自然みたいなのを初めて感じたんですよね。

そのときに、日本の本土で感じてた自然っていうのは、長い間、人間が関わりの中で、ある程度、管理をしてきたっていうか、そういうものを自然だって思ってたんですけど、沖縄に来たときに、人間の時間だったりとか、価値だったりとか、そういうものが入り込んでない、その外側にあるような、ちょっと言語化難しいんですけど、野生だったり、神秘だったりするような、そういう自然がまだ残ってるんだということに驚いて、一つのパラダイムシフトみたいなことが自分に起こったんですよね。色染めてみても、やっぱり、内地にいたときの植物と、全然違って、例えば、フクギという植物の黄色にしても、今まで見たことないような力強さだったりとか、色そのものが発してるものが、今まで見たものとは違ったんですよね。その感動みたい

なものを、服という媒体だと、ちょっと伝え切れないなって思ったのが、インスタレーションをやりうと思ったきっかけの一つで、もう一つのきっかけは、洋服という媒体だと、お金を出して買うという行為につながるわけで、誰かの所有になるんですよね。

色という生命力

でも、物欲とは、全く懸け離れたところで、色というものの、色という生命力そのものを、じっくり味わってもらいたっていうのが、自分の中に強く、思いとして出てきて、そのときに、空間作品として、買うことのできないものを作ろうっていうふうに思ったのが、インスタレーションを制作するきっかけになりました。そこから、衣服の制作をしながら、それとバランスを取るように、こういう全くお金にならないような、インスタレーションの制作を並行してやっていくっていうことで、自分はバランスを取ってる。どっちも両輪なんだろうなと思ってるんですけど。スライドショーが映らなかったのが残念なんですけど、ありがとうございます、これ、京都のお寺で、初めて、インスタレーションの作品として発表したものなんですけど、このときのテーマというのは、人間も、自然も、動物も、虫も、全ての

存在が、優越なく等しいっていう目線の中で、何を表現するか。

私はそのときに、布と色で表現して、その他に、音の人とか、香りの人、お茶の人、いろんな関わりのある人たちに、そういうふうに声を掛けさせてもらったんですよね。全てがこの場所においても、等しく存在しているとするならば、あなたはどのような表現をされますか。それだけがテーマなので、それを持ち寄ってくださいというふうに伝えて、この場をつくりました。これ、京都の安楽寺というお寺でしたね。だから、インスタレーションという便宜上、言葉を使うんですけど、作品という表現が、自分にはどうもフィットしないときが多くて。作品というと、どうしても、私が作りました、みたいなニュアンスが強くなるんですけど、私はただの通り道でありたいと思うので、できる限り、自分っていうのを排して、何かを素直に表出させる間のものでありたいなというのは、いつも思います。そんなふうに、ものづくりをしています。言いたかったこと、たくさんあったんですけど。

高橋 ゆっくり、もう一回、次のターンで話をね。

橘田 なかなか言えないんですけど。

高橋 私もすごい今、聞きたいこと、いっぱい。どこで、合いの手を入れようかなと思いました。

橘田 そうですね。じゃあ、そんな感じで、10 分ぐらいたっちゃったかなと思うので、次は。

高橋 ありがとうございます。次、じゃあ。

橘田 バトンを渡したいと思います。

高橋 それでは、早野洋介さん、ご準備はよろしいでしょうか。

早野 早野と申します。北京で、MAD Architects という建築事務所をやっており、今年で 20 年になります。ちょうどこの週が立春、中華新年なので、たまたま日本に帰ってきており、そこで今回、このような会に参加させていただき、非常に興味深くお話を拝聴しておりました。オフィスは北京にありまして、中国人のマ・ヤンソンとダン・チュン、そして日本人の私の 3 人パートナーでやっています。これが北京のオフィスの様子なのですが、大体、北京のオフィスで今 80 人ぐらいと、イタリアのローマ、アメリカのロサンゼルスにもオフィスがあって、そ

れぞれ 15 名ほどいて、世界中でプロジェクトを並行して進めています。われわれが今、現代をどう考えてるかということを、少し、今回のテーマに関わるかなと思うのでお話をさせていただきます。今の時代、我々が建築を建てるための社会が、どのような状況になっているかと考えると、都市の時代に入ってきてるんじゃないかと思っています。

20 世紀のグローバリゼーションを経て、さまざまなテクノロジーが表れて、われわれが現状をどう見てるかという、世界中の都市に向かって、新しい線が引かれ始めているんじゃないかと思います。ある都市からある都市へと、またそこを中心に、また新しい線が引かれ始めてる状況かと思っています。それは人の流れであり、資本の流れであり、新しいアイデアの流れかと思っています。今まで見てきたわれわれの世界地図とは違う地図が、今、世界に引かれ始めてる中で、われわれの「未来」や「都市」は、どのような状況を迎えているのかを考える必要があると思っています。現状を進んだ先にある未来に到達するというのが理想的である訳ではなく、明らかにあるパラダイムが変わった現代、われわれは社会において、望むべき未来が、どんな場所になっているかを見据えて、各プロ

ジェクトを推し進めていかなきゃいけない。プロジェクトごとに個別に対応するという考え方を変えてかなきゃいけない。それは恐らく、今日話していることも含め、環境の変化であったり、気候変動、さまざまなスケールで多くの方が語られているけども、それと同じように、都市における建築も、つくり方をどう変えていくのか、未来に対して、ある一つのプロジェクトをクライアントから依頼され、それに対する回答を与えるのではなくて、ある未来のビジョンに対して、それを実現する為に、一つじゃ足りなければ、三つ四つ、東になってでも、未来をつくっていく態度に、変えていかなきゃいけないんじゃないかと考えています。

我々は、アジアすなわち東洋に住んでいて、さまざまな歴史の中で、自然と人がバランス、調和をとって、ある快適な文化的な空間や住まい方をつくってきました。これは、中国の山水画なのですが、ある山の上に、1人、仙人なのか、ある人がたたずんでいるんだけど、そこに人がいることによって、我々の感情は、彼に引き寄せられていきます。彼が何を見てるのか。この視点からは見えない何かを彼はあの場所から眺めているのだろうか、そこからは眺めが抜けていて、どのような風景が広がっているのだろうか、

我々の認知を拡げてくれます。自然の中にある空間性を見つけて、それに対して人が住まう空間としての調和をどうとっていくか、そこには恐らく、東洋の世界観があり、僕らは今、その延長上の未来を生きているのだと思います。資本主義により、均一化が進む現代において、土地からさまざまなことが剥離していく中、それでも人、自然、そして、都市というものが、一体につながりながら、その場所でしかあり得ない、場所をしっかりと保ちながら、どう未来をつくっていくのかを考えることは、恐らくわれわれの世代に託された大きな役割であり、この機会を逃すと、未来の風景は、一気に変わってしまうのではないかと危機感を抱いています。

時を遡り、何百年、何千年も前にこの土地から船に乗り、まだ見ぬアジアに向かって行った人たちというのは、国の境界ってというのは見てなかったのだろうと思います。ただし、船に乗ると、聞いたことない言葉だけど、周りにはいろいろな人がいろいろな言葉を使って会話をしているのを見るわけですよね。その中にたまに分かる言葉が出てきたり、なんかこの人が使っている道具が自分の持っているものに似てるなということがあったはずだと思うのです。都市と呼ばれるような場所に

行けば多くの人が集まって来ていて何か新しい知識や情報が得られる。では、それをどうやって持って帰ろう、というように、人を介して文化がにじむように広がった世界があちこちにあったと想像します。それを踏まえて今現在、この先のアジアの未来をどうつくっていくのかということに、非常に興味があります。人と建築と自然というのが、分断されずにつながりあう、都市の建築の在り方ができないか。例えば、「都」というのは、歴史の中で多くの人が集まった場所ですが、これは杭州という、宋の時代に都だった場所ですが、風景が非常に美しく、世界で初めての観光都市とも呼ばれるようなところなんです。その西湖を囲む美しい10の風景がどうつくられているのかを紐解いてみると、自然の要素、人工の要素、そして橋や湖越しなど風景をどこから見るかというビューポイントの3要素を組み合わせさせていて、調べていく中でおもしろいのが、これらの風景を設計したのは、1人の皇帝でも、都市設計者でも、建築家でもなく、何世代にもわたってこの都市に関わった多くの知識層によって作り上げた風景であると思います。興味深いのは、ある時代において、この都市が人が住まう場所としてどのようにあるべきかという美意識が様々な人によって共有さ

れていたということなのです。ある時点で、人間が風景に手を入れることを止める。これ以上人工物を差し込まないという、経済よりも環境を優先する判断が行われ、その結果として我々が今日の前にする風景へと繋がっていると思うと感動を覚えます。

ここから、簡単に4つこれまでに手掛けたプロジェクトをご紹介します。一番初めのプロジェクトは、オフィス始めて、一番初めに行ったプロジェクトで、建築のプロジェクトではなく、金魚の水槽です。オフィスの周りを歩いているときに、道端で金魚を売ってるおじさんがいたんですね。それを見たときに、ひょっとして、金魚は、われわれ建築家に、僕らが金魚の言葉を聞こえないだけで、こんなところに住んでいたくないって言ってるのかもしれないと思ったのです。我々建築家は、社会でものをつくるときに、そこに住まう人と直接コミュニケーションをせずとも、つくっていきなりいけな場面が多くあります。マンションを設計するときに、nLDK という言語を用い、一般ユーザーという、ある意味顔のない使用者に対して設計を行っていくことのように。では、その社会が発してる言葉を、自分たちがいかに聞くかということが重要じゃないかと気づいたんです。それはつまり、金魚

の言葉をどう聞かかということと一緒にではないでしょうか。早速金魚を買ってきて、ガラスのボックスに入れてリサーチを始めました。餌をあげたら、午後の光が入ってきたら、金魚がどう動くかを調べました。

すると、彼らはキューブ状の水槽の中全体を泳ぐようではなかったのです。なぜ彼らは、キューブの中の空間を全てを使わないか。そしてなぜ、このグラフ上の赤で示される場所を好むのか。その疑問から、逆に金魚が使っていない空間を彼らが好む空間の特性によって埋めることで、金魚にとって全体がより好ましい住空間になることができるのではないかと考えました。すなわちキューブの一面が溶け出して、内部が外部に解放されるというようなことがデザインとして見せることができるんじゃないかと展開していききました。実際に出来上がった作品に金魚を入れて、その際に彼らが実際にどう感じたかは分かりませんが、我々はこの作品をある展覧会に出して、そこに我々のメッセージ、つまり、われわれは金魚で、金魚はわれわれであるということを伝えるために、男女の人間の模型をそばに置いて展示をしました。つまり、何がやりたかったのかというと、学校なら学校、駅なら駅という形の建築があるわけではなく、その

場所がどの時代にどのように使われているかを理解し、社会がその建築に何を求めているかを聞く、そしてそこに形を与えるのが、現代の建築家だということで、この作品はわれわれにとって、今でも非常に重要な意味を持つプロジェクトです。

次にアートのプロジェクトに関わるものですが、2018年に行われた「越後妻有大地の芸術祭」の一環のプロジェクトです。「越後妻有大地の芸術祭」は、非常に豊かな自然、環境の中に、外部から建築家、アーティストが来て、地元の人と共同することによって、作品を通してどのように価値をつくっていくかという試みです。我々が手がけたのが、清津峡トンネルという場所のリノベーションです。清津峡は、黒部峡谷と並ぶ日本三大渓谷の一つであり、清津川には雪解け水が流れ、柱状節理が見事な非常に美しいところです。1996年、その風景を見るためのトンネルが造られているんですね。このトンネルというのは、全長750m、往復で1.5kmになります。その途中に、三つの見晴らし所と最後四つ目の見晴らし所が設けられていました。かつては入り口に、待合所があって、そこには足湯もあったり、いざ中に入って400mぐらいトンネルを歩いていくと、見晴らし所が現れ、外に広がる

清津峡の水の流れを見ることができるんです。最後の見晴らし所は、このように溪谷に対して正対して、風景を見ることができるのですが、溪谷に対して、風景を見るための通路としてのトンネルではなくて、いかに全体の体験を自然と出会う旅にするかということテーマに、リノベーションしていきました。まずトンネル手前にあるエントランス施設になりますが、2階建てで、1階にカフェとインフォメーション、2階に上がっていくと、真ん中には足湯があります。この足湯も、トンネルを掘っていた1996年に、トンネルの中から出てきたお湯を使っているのです。足湯の頭上は外に開いていて、その開口部を鏡が覆っていて、そこに反転した遠い場所にある清津川の風景が見えます。我々はこの旅の始まりとして、まず足の裏でこの大地の恵みである温かいお湯を感じながら、外の風景は見えないけども、外からこの軒下を通して入ってくる風と、音と、そして反転した川の流れを見ることによって、いかに自然を身体的な作用を持って感じるかということを、まずブローグとして、感じてもらっています。

次にトンネルの中に入っていくと、かつてのトンネル、いわゆる移動空間だったものを、光のトンネルとして、

外部にテーマを持った5色の色のつながりと変更しました。外から光が入ってくる入口付近の黄色や、最後の水の空間に繋がる青などを、照度を落としながら、日常からある神聖な場所に移動してくような、光のトンネルに作り替えました。一つ目の見晴らし所は、あえてかつてのままに残しています。これは地元の人との話し合いの中で、やはりこのトンネルの持つ歴史や、コミュニティにとっての意味を感じてもらうためでもあります。そして二つ目の見晴らし所には、公共トイレを設置しました。ドームの中の前と後ろにそれぞれブースがあって、特殊な半透明の素材によって、外から中は見えなくても、中から外を見ることができます。しかも、表面のステンレス塗装によって、反射し、あたかもドーム自体が形を失うように見え、新しい形で外部の自然を体験してもらいたいと考えた場所です。

三つ目が、もともとの照明器具を使い、水滴のような形をした鏡とオレンジ色の照明を設置したものです。トンネル側にいると、なかなか暗いですが、外部に開けた側にいくと、外の圧倒的な光と緑が中に反射して入ってきます。日の光が、時間によって全く違う風景を反射するということを体験できます。そして最後の見晴らし所では、

ももとの空間に、足元に水盤を張り
ました。また、壁天井にはステンレス
パネルを貼ることで内部と外部の境界
線があいまいになり、床に川のように
写ってるのは外の空というように、内
部が外部の一部になるような状況をつ
くりだしました。実際、この空間の入
り口に立ったときは、外の川の風景は
まだ見えません。聞こえるのは、その
川の音、そして強烈に入ってくる風の
強さ、そして、徐々に水盤へと入って
いくことによって、反響や反射が変
わっていきます。この水盤の水は、外
の川からポンプアップして上げている
ので、みんなに靴を脱いで入ってもら
うんですが、夏場でもかなり冷たく、
人が入ると、冷たくて長くは水盤の中
にとどまってることができなく、速足
で移動をしていきます。人が歩くこと
によって、水面に波紋が起きて、風景
がぼやけることによって、これが初め
て、人工的なものであったということ
に気づくのです。これが、人がいない
ときは、完璧な反射となって静かな水
面を見せてくれます。365日、外部の
自然が微妙に変化して、その反映であ
る内部も、それに呼応するように、変
化する空間になっていると思います。
この写真のようにたくさんの人が水盤
の中にいても、これだけきれいな反射
が写ってるというのは、なかなか珍し

い状況かと思います。このとき、水盤
の縁に立ち外の風景を見ながら風を感
じてる彼らは、恐らく入ってきたとき
は、異なった感情を持ちながら、日常
に戻ってくんじゃないかなと想像しま
す。今日のお話しのテーマにつなげ
ると、場所の環境、自然、そして、そ
の特徴というものと、もう一つ、そこ
にあった歴史や文化に込められたいろ
んな思いを解きほぐしながら、新しい
風景をどうつくっていくかということ
に、今、我々は興味があり、やはり、
こういう場所をどう残しながら、更新
していくかということは、我々世代の
建築家として、大きなテーマになるの
かなと思います。ありがとうございます。

高橋 ありがとうございます。

橘田 これは、常設なんですか。

早野 これ、常設です。ぜひ訪れても
らえれば嬉しいです。

高橋 見た方の声を記録したり、拾っ
たりもしているのでしょうか。

早野 してます。

高橋 どのようにでしょうか。ぜひ、

その場に立った方の声を聞いてみたいです
ですね。

早野 訪れた若い子たちに聞くと、トンネルに光が差し込むので、手前から写真を撮ると自分の顔がシルエットになる。だから普段よりも大胆にいろいろなポーズをして、写真を撮って楽しんでいるみたいです。そのような写真が今、インスタグラムなどで人気を集めているようです。自然と風景と人が一体になる体験ができる、新しい日本の風景の在り方みたいなものを発見することができたと感じています。建築でもなく、インスタレーションでもない、微妙な風景のつくり方になったのかなと思っています。

わざの人類学とマンガ実験

高橋 おもしろいですね。聞きたいことは、ぜひ、あとのフリートークで。ありがとうございます。では、最後になりますが、フレドリック先生、お願いします。

フレドリック Thank you so much for organizing this meeting today. The content is truly rich—so rich that I feel we cannot possibly discuss everything in just one day.

I am an anthropologist, and what I've dedicated my life to isn't so much the relationships between people or social and political matters, but rather themes of nature, animals, and material culture.

I used to lead a research network in France called "Techniques & Culture," which studies social and cultural dimensions of techniques and materiality. When translated from English to Japanese, I believe "Techniques" corresponds to the concept of "waza" [skill/technique/craft culture]. I have worked with many people from Japan and Europe in order to make a collective and interdisciplinary book on the topic.

Through my work, I've come to believe that it's a mistake to divide "savoir-faire", "know-how", "knowledge and making", into two opposing categories. We published the book about waza with contributions from 25 people from various fields—not just anthropologists, but also those in literature, carpentry, architecture, and more "Waza, l'art ineffable de l'apprentissage" 2021 (dir. Joulian, Shimada, Takada, Tian) Paris : EHESS

(<https://journals.openedition.org/tc/16054?lang=en>).

In Western understanding, there's a tendency to separate humans from nature, and nature from culture—to think in dualistic terms. But in Japan, I believe there's another integrative way of thinking where culture exists within nature, and nature exists within culture.

Therefore, whether in French, Italian, African languages, or Japanese, I think it's better to recognize these concepts as local terms rather than academic scientific terminology. So the role of anthropologists, I believe, is to discover this diversity of useful local lexicons.

This photo is of my father, who works as a carpenter in France. He was 88 years, but he still works using a chainsaw, a planer or a spindle molder. Regarding waza and the use of tools, I was influenced by my father. He was truly an expert I learnt from.

(今日は、このようなミーティングを催していただきまして、本当にありがとうございます。もう本当に内容が豊かで、豊か過ぎて、1日では、本当に

語り尽くせないと感じております。私は人類学者で、私が人生を懸けてやっておりますのは、人と人との間柄ですとか、社会や政治的なものというよりも、自然や動物、そして、モノ文化というものをテーマとしてやっております。私はフランスで Techniques & Culture, 「わざと文化」に関する研究チームのリーダーをしています。英語でいうところの Techniques & Culture でやっておりますけれども、これを日本語に翻訳をした場合に、Techniques は「わざ」を意味すると考えます。私は、これまでわざについて、多くの方々と一緒に仕事をしてきました。これまでの仕事を通して、知識と作るということを対立するように二つに分けてしまうことは間違えであると思っています。このわざに関する本を、人類学者だけではなく、文学や大工仕事、建築家など、25名のいろんな分野の方に寄稿していただきまして、出版しました。

我々、西洋的な認識では、人間とそれから自然というもの、自然と文化というのを、分けて考える、二元論的に考えるというようなものがあります。日本では、自然の中に文化があり、また自然が文化の中にあるというような、統合するような考え方にあると思っています。このため、フランス語であれ、イタリア語であれ、アフリ

カの言葉であれ、日本語のものであれ、学術的な用語としてよりも、その地元の言葉として認識していくことが、より良いと考えます。ですので、人類学者の役割というのは、このような多様性、これを見いだしていくことであると思っています。

この写真は、私の父なんですけれども、フランスで大工をしています。今、88歳なんですけれども、今もチェーンソーを使って仕事をしています。わざや道具の使い方という点について、私は私の父から影響を受けました。非常に、父は専門家です)

I am also a scientist, and I've been studying chimpanzees in Africa for 30 years. Chimpanzees also use what could be called techniques. They possess the skill to crack nuts with hammer-like tools, breaking them open in just one or two strikes. When I tried to imitate them and crack nuts myself, it took me three whole months to master a successful opening.

In this way, I've studied animal behavior in the natural world, and we've learned lessons about how to live in and with nature. I find it very difficult to explain exactly how these techniques work.

I'm trying to understand this behavior, this knowledge, this waza, and how one lives and dwells within this context without hierarchies between humans and non-humans beings.

Today, all participants are trying to explain their existence in the present moment through the act of making something. This makes me, as an anthropologist, wonder how we should approach this task. Anthropologists are searching for new methods to convey various ideas and ways of thinking between different cultures.

In today's discussion, the word "Ma" (between, interval) has come up, and I think this concept of ma is very important. Waza and Ma, yes. I believe this concept of Ma should perhaps be applied not just between humans, but also between humans and non-human societies.

Over the past decade, my practical solution for thoroughly understanding and giving form to ideas has been to use graphics—to use manga.

There's a French manga artist, François Boucq, I like, and I ask him to draw ancient hominids or an "Ape-Man". What you're seeing now is a mix of human and gorilla or chimpanzee, which became another way to visualize and explore a prehuman alterity. Using pictures and photographs allows us to create chimeric entities. I believe such chimeras are necessary for imagining the future. So, I myself arrived at "manga" exploration.

This diagram shows "pure science", but when people look at it, it becomes rather dull in form. So I arrived at manga as an art-science mean for people. The challenge, I think, is how to integrate and synthesize the different types of intelligence and techniques of scientists, manga artists, architects, and craftspeople. There are various professions, and success depends on how we curate them—how we weave together these different types of activities and languages.

(私はサイエンティストでもあり、30年間、アフリカでチンパンジーの研究もしてきました。チンパンジーも、いわゆる技というのを使っています。チンパンジーは、かなづちのような、ハンマー的なものを使って、木の実を1

回で割ったり、2回で割るという技を持っています。私も、まねをして、ナッツを割ろうとしたんですけども、私の場合は、3カ月もかかってしまいました。

このように、自然界の中で、動物の行動なども研究してきたわけですけども、自然の中で、そして、自然に対して、どのように生きていくかということのレッスンを、私たちは学んできました。この技をどのように説明すればいいのかというのは、とても難しいと思います。この行動、それから知識、わざ、ここに暮らす、住むということ、どのようにしているのかを理解しようとしています。

今日の皆さんは、何かものをつくるということを通して、今、ここに生きているということを説明をしようとしている。それでは、人類学者はどのように、それをやればいいんだろうかと悩むわけです。人類学者というのは、異なる文化の間で、いろいろな考え方やアイデアをどのように伝えることができるのか、その新しい方法を模索をしています。

今日の話題の中でも、『間（あいだ）』という言葉が出てきましたが、このあいだという考え方がとても重要だと思います。わざとあいだ、ですね。このあいだという概念は、人間同士ではなく、人間ではないものと人間の間にも

使われるべきだと思います。

この10年間で、私がアイディアをしっかりと理解して形態を伴った、実践的なソリューションとして編み出してきたものは、グラフィックを使う、マンガを使うという手法です。私が気に入ってる、フランスのマンガ家がおりました、その方に猿人を描いてもらいました。今ご覧いただいている、人間とゴリラなのか、チンパンジーなのかのミックスというようなことで、これをソリューションにしたわけです。絵や写真などを使えば、いわゆるキメラ的なものをクリエイトすることができます。将来を想像していく上において、キメラが必要だと思います。ということで、私自身は、「マンガ」に行き着きました。

これはもう、純粋なるサイエンスなんですけれども、これは人にとって、私たちが見るときに、つまらない形になってしまうということで、人々のための、アートサイエンスということで、マンガのほうに行き着きました。問題は、例えば、サイエンティスト、それからマンガ家、建築家、そして、ものづくりをする人たちの、知性や技、それぞれ違うタイプ、それをどのように統合して、まとめていくかということかなと思います。いろいろな仕事があって、それをいかにキュレートしていくのか、違う、いろいろなタイプの

ものをいかにそうやって編み込んでいくのかということが、成功に関わってくるのだらうと思います)

Regarding how I approach this work, I'm trying first to learn from the past—that is, learning from mentors of the past. There was a person named Kon Wajirō, who might be called the father of modernology. He drew pictures or manga depicting the styles of people of his time. In Kyoto during the 1920s, after the Great Kantō Earthquake, he illustrated how people were sleeping on the streets. As an interesting comparison, there's the great anthropologist Marcel Mauss, who published a paper on the "Body Techniques" in 1936 describing with words analogous cultural body customs Kon Wajiro did by drawings.

I'm engaged in manga anthropology activities with a landscape manga artists, Horiguchi Itsu, from Kyoto Seika University, than with Aurelia Aurita, the manga artist who created "Ichigo to Chocolate" LEED 2017 (https://to-ti.in/product/fraise_et_chocolat), We created with Horiguchi an exhibition about Japanese washi papermaking and with Aurelia and

Matthias, the architect) a Manga on eco-construction published in 2025 "Concrete versus bamboo, propositions for Mayotte Island and the World" <https://www.editions-delcourt.fr/bd/preview/le-beton-et-le-bambou>

In our research, rather than simply presenting our findings as academic papers stating conclusions, we convey the story of the research itself. We're trying to communicate the stories of research activities by architects and ethnographers in this way. For example, I observe artisan's gestures while the mangaka is able to make a narrative of the technical aspects and of the "milieu" (fudo). A "scientific" manga is able to integrate different visions, another way to tell artisan and researcher experiences.

Therefore, I find the objects themselves very interesting. Here are a brush and camellia leaves, but these camellia leaves are actually more important, even if they are perishable, than the horse hair brush—they show that the technique of washi papermaking is completed and successful because of these leaves used to seal the papers ends.

We exhibited these elements in Provence, France, bringing in objects like this for people to see. I'll skip the details, but we created manga about this kind of process where interactive exchanges emerged with visitors.

From this exhibition, we introduced washi in France. In France, people were extremely interested in how we turned the process into manga. And I ended up working on a new project on Mayotte Island in East Africa, building houses using bamboo—a sustainable architectural method.

Mayotte is a very small island with a volcano and coral reefs—in that sense, it's similar to Okinawa, with similar tropical vegetation. There's currently a social problem there with large numbers of immigrants arriving and slum formation among the poor. There's also soil erosion. Moreover, modern architecture there consists entirely of concrete buildings.

While the Mayotte administration is promoting this model of concrete buildings, we worked with a French architect to see if there might be

other methods. We worked with local craftspeople to construct buildings using bamboo and clay.

We've drawn all the operational sequences (chaînes opératoires), natural and social contexts in a manga form, as mentioned earlier. We're currently producing a new manga with a French publisher titled "Concrete VS Bamboo." I've gone on a bit long, so I'll stop here and show images.

(私がどうやってそれをやるかについては、過去から学ぼうとしております。すなわち、過去の人から学ぶということで、一つ前のスライドで、今和次郎という人がおりまして、いわゆる、近代学の父と言っていいのかなと思うんですけれども、その当時の人々のスタイルを絵に、マンガに描いたということで、京都で1920年代に関東大震災ですかね、大きな震災があったとき、人々が路上で、どういうふうな寝方をしていたのかというようなことを描いた、絵にしたということで。興味深い対比として、ヨーロッパの人類学者のマルセル・モースがいます。モースは、1936年にボディテクニクという論文を発表しています。

私は、京都精華大学で、マンガ家の方々と、マンガ人類学という活動を

やっております。日本語にも翻訳をされている『ストロベリーとチョコレート』という作品の漫画家であるオヘリア・ウリタさんや、ホリグチさんというランドスケープのマンガ家の方と一緒に、日本の和紙作りのマンガ作品を作りました。

私たちの研究では、研究成果を、ただこういう結論が出たという論文として表明するのではなく、その研究のストーリーを、このように見える形で伝えている。建築家やエスノグラファーなどの研究活動のストーリーを、このように伝えようとしています。このように、例えば、私は皆さんの動きをこのように観察している。しかし、マンガ家の方は、技とかテクニカルな部分、社会的な部分に注目して観察してらっしゃる、というお互い、違うものを見ていることが可視化されます。

このため、モノ (Object) そのものがとても面白いと考えています。ここに、刷毛とツバキの葉がありますけども、このツバキの葉が、実はブラシよりも重要で、これがあるが故に、和紙の技が完成をするということを示しています。このような要素について、フランスのプロバンスにおいて展示をしまして、オブジェクトをこのように持ち込んで、人々、皆さんに見ていただきました。細かいところは省きますけれども、このように、こういう場のプロ

セスを、双方向の交流が生まれて、それをマンガにしていこうということをしてきました。

このような展示から、和紙についてフランスで紹介しました。フランスでは、そのプロセスをマンガにしたということに、すごく興味を持ってもらいました。そして、私は、東アフリカのマヨット島（Mayotte Island）で、竹を使って造るという、サステナブルな建築方法で、家を造る、新しいプロジェクトをすることになりました。

マヨット島、とても小さな島で、火山があって、サンゴ礁もあって、そういう意味では、沖縄とも似てるんですけども、トロピカルで植生も似ている。ここで、今、移民が大量に押し寄せて、貧困層が住むスラム化が進むという社会問題があります。さらに、土壤の浸食があったり。さらに、近代建築では、すべてコンクリート建築づくめになっています。

マヨットの行政が、このようなコンクリート建築のモデル化を進めているんですけども、私のほうは、他に方法がないものかということで、フランス人のアーキテクトと共に、活動しました。現地の職人さんと、竹や粘土などを使って建物を造ることをやってみました。オペレーションの流れですとか、寸法だとか、そういうのも全部、先ほどのようなマンガの形で描い

てきました。新しいマンガをフランスの出版社と共に、現在、制作中で、『セメント VS 竹』というタイトルです。ちょっと長くなりましたけれども、この辺で止めておきたいと思います。）

高橋 ありがとうございます。フレドリック先生。どうしましょう。あと、残り 30 分ぐらい。きっと、それぞれのプレゼンテーションについて聞いてみたいことがあると思うので、自由にいきましょか。今の竹建築の話、もう少し、聞きたいんじゃないかなとも思ってたんですけど。どうぞ、早野さん。

早野 竹というのは、マイヨット島ではよくある植物なのでしょうか。

フレドリック 古い時代に、外から持ち込まれた植物です。

早野 でも、今では家の建築材としては使われていないということでしょうか。

フレドリック もともとの伝統的な家屋は、竹でできてたんですけども、それで、今は中国の非常に大きな竹や土、木材、様々な野菜の繊維を使って、また建築をしようというふうに、友人とやっています。

高橋 竹というのは、建築材としての価値はある一方で、増えてしまうことが、いろんな地域で問題になっています。マイヨット島でも、生態系を変えるような現象も起きてるんでしょうか。

フレドリック 包括的な環境問題というのもあって、竹というのは、やはり、管理をきちんとしないと、どうしても生い茂ってしまって、例えば、川をふさいでしまったりっていうことで、山へと続く川をまた流れるようにするために、管理しなくてはいけなかったりしますし、あと、その他にも、プラスチックの問題ですとか、化学薬品の問題ですとか、マヨット島には、いろいろ問題があって、移民ですとか、あとは、やはりそれに伴って、暴力の問題とか、そういうものもあります。そういうふうに、近代化がどんどん進んでいく中で、自然のものではなくて、コンクリートを使ってしまうっていうことが起きています。

私にとって非常に重要な問題っていうのは、どうすれば、新たな夢が可能になるのかっていうことなんですけれども、今までそういう人たちが思い描いていた夢っていうのは、近代化、いわゆる、コンクリートを使って、空調を効かせてっていうようなことだったん

ですけれども、やはり、人々のローテクの部分というのが、とても大事だと思います。実際にはローテクであることが、人にとって、重要なものだと思うんですけれども、そこには教育が行き届いていません。モダニティ、近代化というのは、イコール、セメントを使うことだと教えられており、それが環境汚染や水資源問題をひき起こしています。ですので、私にとって解決すべきことは、いかにして人々に、大手資本主義企業が売るコンクリートだけでなく、他にも建築や住まい方があるのだと、伝えるかということでした。

高橋 その回答に少し近いのかなと。昨日、芭蕉紙作家の坂奈津子さんの工房を訪ねた時にも、フレドリック先生から、ヨーロッパでは、手仕事、手を使って仕事をしてきた人たちやその作品というものが、どちらかというと、芸術作品と比べると、価値が低く思われてきた歴史についてお話を伺いました。ただ、今、フレドリック先生の、マヨットでのプロジェクトを見ると、まさに山口さんの家の造り方と、すごく似ているかなと思った点がありました。それは、その場所にある素材を使うっていうことと、もう一つは、多分、その伝統的な方向で、一緒に、地域の方と造ることによって、外

から来た研究者が何か教えるっていう立場から、その土地の人たちの知識や技を教えられるという立場に変わっていくプロセスを生んでいるというところが、このプロジェクトのおもしろい点だと思いました。そのプロセスの中で、教える、教えられるという関係性が反転したり、混ざっていくということに、私たちが知識を伝達していく新しい方法の可能性があると聞きながら思いました。

山口 そのプロセスっていうことのうちに、きっと、教育、エデュケーションっていうのが含まれていくのかなと思う。

音響係 マイクを。

山口 ごめんなさい。

高橋 忘れちゃうね。どうぞ。もう一回？

フレドリック プロセスということ。

山口 そうです、プロセスという中に、教育、エデュケーションというのが含まれて、学校でされるものではなくて、そのプロセスを共有していくっていう価値の中で、教えるとか、教えられるっていう立場を越えて、それが交換され

ていくっていうことなのかなって思いました。

フレドリック 今、私たちがお互い言ったことが答えだと思うんですけれども、人と一緒に何かをつくるっていうことですね。やはり、例えば、何かをつくる时候にも、子どもとか、その職人に対して、技が大事なのか、どういう技が大事なのかっていうのを、聞くことが大事だと思います。例えば、何かこういう建築物を造るにしても、木とか植物の品質、そこがとても大事になってくると思います。やはり、学びというのは、学校で学ぶことだけではなくて、そういう身の回りにある小さなものを学んでいくっていう、経験から学ぶことというのが、やはり、スタートだと思います。ですから、実際に、ものをつくるというこの経験、そこが学びになると思いますし、ですから、喜如嘉で、きょう、見たかたがたも、そういう学校で、特に学んだというわけではなくて、実際に、物、材料を触りながら、どういうふうにデザインをしていけばいいのか、モチーフを作っていけばいいのか、線を引いていけばいいのかというのを、学んできたんだと思います。

フレドリック 建築家の皆さんにお聞きしたいんですけども、住宅のあり

ような違いというのをどういうふうにコントロールされていますか。例えば、西洋だと、締め切って、例えば、全くコントロールして、住環境をしてしまうというところがあるんですけれども、日本の場合は、特に、その土地、寒いところなら、寒いところなりで、身体を温めたり、その土地のものを食べるとか、そういうことをしてると思うんですけれども、もっと自然の中です。ですから、西洋の住まい方と、日本の住まい方というのを、どういうふうに取り組んでいらっしゃるのか。

山口 家の違いについて、建築家がどう向き合うかということ、どう捉えるかということ、今の建築の価値というのが、西洋の価値観から来るものであるのであれば、例えば、寒さに対する考え方というのは、家の中を完全に密室にして、断熱にして、家のインテリアを完全にコントロールするという考え方だと思うんですね。その背景にあるのは、何かというと、一つはヨーロッパは石の文化である。そして、ヨーロッパは冬寒い。冬寒いと、人間って、凍えて死んでしまうんですね。それを死なないために、室内をコントロール、仕切るという文化がある。その家の文化というのが、発展してて、モダン、モダンティというものも、そこに

あるのかなって思います。だから、その対比として、われわれが考えられることというのは、冬、死なない、沖縄の暖かさということと、あともう一つ、僕らの持っている木の文化、森の文化っていうことが、私たちの伝統の中から学べる、一つの学びなのかなと思います。それは、今、僕らが持っている文化ということ、掘り起こして、もう一度見直すことっていうのが、西洋に対する、一つのカウンターになり得る期待はありますね。

フレドリック ありがとう。橘田さんに質問なんですけれども、先ほど、プロダクトを越えて、インсталेशनという、言葉を使われてましたが、プロダクトを越えて、その感覚、フィリングを伝えていきたいとおっしゃったと思うんですけれども、色の概念も文化によって異なりますが、多様な人々にどのように色を伝えていくとお考えでしょうか。

橘田 これがちゃんとした答えなのか分からないですけど、やっぱり、例えば言葉でも、感じてることを、そこにちょうど当てはまる言葉を得たときに、その認識というのは生まれてくるじゃないですか。そんなふうに、風景を、例えば、見ていても、たくさんの色があるんだけど、その色の存在がそ

の人の中に入ってくるのは、その色が自分がちゃんと認知するというか、出合うということがないと、見えてこないと思うんですよね。そういうのって、世界を見る解像度みたいなものだと思うんですけど、私が例えばワークショップでやるのが、いろんな緑を染めるっていうワークショップをやるんですね。例えば、緑色といったときに、ここにいる全員が思い描く緑色は、微妙に違うと思うんです。例えば、緑って、ワークショップの最初に言うのが、黄色から青までの間は、全部緑です。じゃあ、あなたの今、思い描いてる緑っていうのを、どういうふうに染めたらいいかっていうので、緑色というのは、藍で染めた青色と、フクギで染めた黄色の重なり合いで出していくんですけど、じゃあ、あなたが今、イメージしてる緑色に一番近い、緑を染めていくのに、じゃあ、青はどのぐらい染めて、黄色はどのぐらい染めるか、そういうふうに伝えていくんですね。それって、やっぱり、緑って言ったときに、思い描いてる一つの緑じゃなくて、その緑の幅をとにかく広げてもらいたい。そうやることで、世界を見る目に変化していくんじゃないかなとは思ってます。

高橋 その点、すごく今の質問に近いなと思ったのが、個の認識や、個の経

験、あるいは、個の意識みたいなものと、社会システムを変えていくと言ったときに、その間をどうやってつないでいくかということが、もしかすると、私たちが今考えなきゃいけない問題なのかなと思いました。

早野 きっと染め物も、いろんな文化や文明の中にあり、自然のものを使って染めてきた歴史があって、様々な人為的な染め方が存在し、その中から土地に独特の文化みたいなものが出現してきて、その過程において、どれだけの人が受け入れて、地域における意味を持つカラーになってきたのかというのがあるのだろうと感じました。恐らく、世界中のそういう染め物の歴史を見ていくと、あるレンジに収まってくるというのは、必ずあるだろうなと思います。恐らく元の質問に近いのかなと思いました。

高橋 Kittaさんの表現活動としておもしろいと思ったのは、最初は服という物資文化を通して色を表現していたことが、インスタレーションという、色の様々な面を感じられる空間をデザインする手法へと変化している。

橘田 そうですね。色というのが、やっぱり、見るって視覚的なものなんだけど、やっぱり、視覚を超えた何かが、

植物で染めてる色にはあると思っているので、そこは、見るっていうよりも感じるようなものだと思うので、だから、色を感じるための作品とかを作ってますね。色って何なのかを体感してもらいたいっていうか。

高橋 そのアイデアとして、お茶や、香りの専門家にも参加してもらおうプロジェクトにデザインをしたということなのでしょうか。嗅覚という人間の感覚に着目していく。

橘田 そうですね。だから、五感を結局、何がやりたいかという、きつと、感覚に刺激を与えたいんだと思うんですよ。ありとあらゆることでできてる、ただ一つのことだけじゃ、表現し切れないことがあって、私たちには五感があって、こういうふうに時間があって、常に変わり続けてるものの中にいるので、変わり続けてるということを基準に置いてると思うんですよね。感覚として。例えば、木の家だって朽ちていくし、植物で染めた色はあせていくけど、あせないもの、壊れないものというのを目的にするんじゃなくて、あせたり、朽ちていくっていうことが、本質なんじゃないのって、本来なんじゃないのっていうところで、でも、やっぱり、台風で倒れたら嫌だよねとか、そのバランスをこれから私たちは、

どういうふうに取りっていくのかなというのは、すごく思います。

早野 1点、質問なんですけども、先ほどの、いわゆる、服のときに染めた色、服というのは、やっぱり、見ていいなと、着た瞬間、自分はそれを見る色じゃないわけじゃないですか。ただし、空間に色を付けようといったときに、そのときに、それはあくまでも空間の中に身を置く、つまり、いる、そのときに、色の使い方が意識で変わったのかどうかというのは、すごく興味があるポイントなんですけどね。

橘田 服は、他者にとっての環境だと思ってるんですよね。例えば、お母さんが着ている服の色は、子どもの記憶にすごい残ると思うんですよ。ちっちゃい背の低い子が、お母さんのスカートの色が、すごいケミカルな色で染められた紫色なのか、それとも、すごく自然な植物で染めたピンク色なのか、それをすごく小さい生き物であればあるほど、私たちの対比というか、大きく感じるじゃないですか。例えば、子どもにとって、特に分かりやすいと思うんですけど、周りの人が着てるものは、環境だと思えるということですね。だから、人間の着てるものっていうのは、環境だと思ってます。風景の中で、やっぱ、染め物、草木の色がいいなと

思い始めたのは、こんなに自然の色が美しいのに、人間の着てる服の色だけが、不自然で気持ち悪かったんですよ。じゃあ、私たちが、この植物のように、この風景の中で調和的であるには、もしかしたら、植物で染めた色を着たら、風景が変わるんじゃないかなというのも、植物染色を始めた一つのきっかけですね。

高橋 午前中に、kittaさんの工房見学させていただいて、すごくおもしろかったのは、植物から色を取ることだけではなくて、その素材になる植物が、どうやって橘田さんのスタジオに辿り着いたのかという、素材となる植物自体の物語も大切だと思いました。そこに住むコミュニティの人が切った木をいただくとか、Kittaさんと地域に生きる方や自然との関係性の中で、その素材になるマテリアルがやってくるプロセスが大切なのだと思いました。単に草木で染めたということだけではなくて、その植物が、植物を育てていた人から kittaさんの手に渡って、染色の「素材」として価値変換するプロセスを、具体的な人との関係性の中で大切にされてるという、仕事との向き合い方をされていると思いました。

橘田 結局、コミュニケーションのことだなとは思いますよね。

高橋 その点が、今回、お話を伺った人たちの中のお仕事の仕方で、大事にされている共通点かもしれないですね。仕事することがコミュニケーションというか、人間以外の存在も含めて、誰かとの対話の中で生み出していくというところにつながっているのではないと思います。

橘田 私から、逆にちょっと質問があつていいですか。お伺いしてみたいんですが、いいですか。終わりますか。大丈夫？

山口 こんな時間ですか。

高橋 そうなんです。一回、ここで締めましょうね。

橘田 フレドリックさんの竹のおうちにしても、山口の木のおうちにしても、私が作ってるような染色の服にしても、布にしても、ものすごく時間がかかるんですよね。結局。多分、他のものを買ったり、注文したりするよりも、時間もかかるってことは、お金がかかるということだと思うんですね。やっぱり、携わってるのが、例えば、いわゆる日本の伝統工芸一般にしても、助成金がないと成り立たないような仕組みになっちゃってる。それはやっぱ

り、人間の労働が時間に換算されると、手のかかるものは、つくれなくなっちゃってるんですよね。そこをどういうふうに工夫しながら、でも、技が失われないうにつないでいって、すごい課題だと思っています。だから、結局、とてもいいものでも、保存されただけで、誰も使わなかったら意味がないし、例えば、植物染色でも、着物の中には、まだ今もあるけれども、着物は高過ぎて買えない。着物は日常には着れない。でも、本当に私はいいののだと思うので、日常に着たいっていうところから、服に落とし込んでみたんですけど、やっぱ、そうすると、時間がかかるので、安いお洋服とかとは、値段が全然、異なっちゃうということ、どういうふうに、例えば、建築の中でも捉えていくか。それは、すごい課題だと思います。そういうことについて、どういうふうに思われてますか。ぜいたく品になっちゃうよということ。私のやってることはね。

フレドリック 今すぐ答えはないんですけど、ただ私なりの考えとか、提案というのはあるんですが、今それを話すと、さらに2時間かかってしまうので、これは次回への新たなトピックということでしょうか。

高橋 分業という点も大事な論点の一

つですね。今までは全体のプロセスを通して一緒にやってきたことが、何かをきっかけに分かれてしまうということで、知識やわざの継承が途絶えてしまう。全体を眺める眼差しを失ってしまう。

新見 ちょっとだけいいですか。

高橋 もちろんです。

音響係 マイクを持っていてよろしいでしょうか。

新見 さっきの、非常にコストもかかるし、ぜいたくではないかというところで、いよいよ私たちのお宿というところが出てきます。この建築も本当に、自分たち住むだけのためやったら、ここまでのものはできないです。あと、橘田さんが染めてくれたものが、うちは宿着になってます。これをご滞在中、お客さまが着ることによって、私たち運営側が感じるのは、それを着ることによって過ごしていただく中で、とても自然と一つになっていきます。お客さまが。最初、いらっしゃったときは、お客さまのお洋服、お召しものなので、ちょっと緊張感とか違和感があるんですけど、次の日の朝、お宿着で、ここにご飯を食べにきたときとかから、どんどん顔がほぐれてきます。

これが、2泊3日の人なら、どんどんですね。そんなふうに、さっき、職人さんたちの話が出ました。一つ一つを買うのは、大変だと思います。この、今、蚊取り線香入れたり、こういう小物入ってます。これ、芭蕉紙の、坂奈津子さんの作品を周りに貼ってます。後ろ、その台座になってるのが、パショウの繊維でできた台座です。それですね。あと、山口君の後ろのコーヒーのフィルター、これも、竹職員が一つ一つ編んでます。とっても、これも貴重なもので、なかなか作る人がいないです。今は。そういうものが、皆さんの日常生活の中で、全て満ちそうと思うと大変だと思うんですね。それで、われわれお宿は、非日常ではあるものの、ここで体験していただいて、時間を、安らぎを石路で過ごしていただきたいという思いが、私の宿業のコンセプトにかかってくるのかなという思いです。以上、ごめんね。途中で出しゃばってしまいました。すいません。

高橋 ありがとうございます。今日のこのダイアログを、このような大切な場で行うことができたことを感謝します。最後に、山口さん、まとめを...

山口 今の、経済的にどうするのかという問い掛けなんですけど、僕が今日、話をしたように、労働ということ

を協調したのは、それはプロセスそのものが一番大事なんだよということを伝えたかったんですね。建築においては、今、ここ、この場所もそうです。僕が意識してるのは、住む人、使う人が、工事に参加する。工事に参加できるような設計にすることにおいて、お施主さんが自ら造る、そこに経験をするということで、プロの人を使わないでも、家が建てれるよというプロセスにすることによって、コストを少なくする、小さくすること、具体的に心がけていることかなということです。だから、自分自身もプロセスそのものが楽しいことが、自分にとっての報酬であるということ、ある意味、言い聞かせながらやってます。

高橋 ありがとうございます。今日のダイアログとして、大事なまとめをしてくださいました。今日はひとまず、ここで、いったん、しめようかなと思います。ありがとうございます。いろんな論点や課題が出てきたのと、共通性も見えたように思います。あと一つは、今日の1日を通して、私たちの今のこの世代というか、今という時代性が、今までやってきた仕事の在り方、あるいは、それぞれの分野の専門性の在り方をいかに変えてくかという時にあるのだなということです。例えば、人類学も、古典的な人類

学の教科書では、人類学者はサイエンスとして、観察者の立場に立ち、文化を客観的にいかに記述できるかということが意識され、エスノグラフィを書いてきたのですが、現在では、私たちもコミュニティに参加しながら、一緒にその文化を理解していくというプロセスを描こうとしている。新しいエスノグラフィのあり方へのチャレンジが起きている。それは、例えば、今回のフレドリック先生のマイヨットの事例や Anthrographic の手法の開発がそうだったと思うのですが、それぞれのフィールドで、今までのいわゆる近代以降の手法を、いかに変えていくかということにチャレンジされてる方たちと、1回目のダイアログができたのかなと思いました。また続きをやりましょう。ということで、いったん、ここで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

執筆者紹介 ※所属は当時

フィールドダイアログ 01

小さなコミュニティの社会的革新—鹿児島県与論島にて

2023年3月29日

Sander Ernst van der Leeuw（総合地球環境学研究所，名誉フェロー）

阿部健一（総合地球環境学研究所）

池田佳（与論町漁業協同組合）

佐藤伸幸（ヨロン島エコツアーガイド連絡協議会）

南勇輔（与論町教育委員会）

田村典江（事業構想大学院大学）

高橋そよ（琉球大学）

フィールドダイアログ 02

植物と水と手仕事と—沖縄県大宜味村・今帰仁村にて

2024年2月11日

Frederic Joulian（フランス・社会科学高等研究院 EHESS）

橘田優子（kitta）

山口博之（建築意思）

高橋そよ（琉球大学）

ゲスト参加 早野洋介さん（MAD Architects）

協力 TSUTO（坂奈津子さん）、琉球料理研究家・西大八重子さん・強さん、
今帰仁「石路」



人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究

地域文化を支える人・社会・自然のつながり vol.8

フィールドダイアログ 島をめぐる、島と語らう ——琉球弧・与論島・やんばる

発行日 2026 年 3 月 30 日

編集 高橋 そよ

発行 人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究

印刷・製本 株式会社グラフィック

DPT Yoron emA

ISBN 978-4-910834-51-1 Printed in Japan

地域文化を支える人・社会・自然のつながり vol.8

フィールドダイアログ 島をめぐる、島と語らう
——琉球弧・与論島・やんばる

高橋そよ 編

はじめに 高橋そよ

フィールドダイアログ 01
小さなコミュニティの社会的革新—鹿児島県与論島にて

フィールドダイアログ 02
植物と水と手仕事と—沖縄県大宜味村・今帰仁村にて

執筆者紹介

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」
地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究

